

●モノグラフ  
小学生ナウ  
Vol. 12-3  
**学業成績**

目次

成績モノカルチャー .....	2
<b>〔調査レポート〕学業成績の持つ意味……深谷昌志・三枝恵子</b>	<b>9</b>
要約 .....	10
はじめに .....	12
1. 学習の実態	
●1日の家庭学習 .....	13
●塾・中学受験 .....	15
●教科イメージ .....	18
2. 得意と苦手の克服	
●勉強のできる子のイメージ .....	21
●小学2～3年生のころと比べて .....	24
●中学生になったら .....	26
●苦手の克服 .....	27
3. 自己像をめぐって	
●性格的な面の自己像をめぐって .....	30
●学力面での自己像をめぐって .....	39
4. 学習を支える環境	
●学校は楽しいか .....	49
●友だち関係は .....	51
●先生は .....	52
●お母さん・お父さんは .....	54
まとめに代えて .....	56
<b>〔ケース研究〕子どもたちにとっての学業成績……山根はるみ・深谷昌志</b>	<b>57</b>
1. 125人のSCT .....	58
1) SCTの作成 .....	58
2) SCTの実施 .....	59
3) 結果の整理 .....	59
4) 個別の事例研究 .....	65
2. もう一つの調査・作文 .....	70
<b>〔対談〕個性の教育と評価のあり方……梶田敦一 VS 深谷昌志</b>	<b>73</b>
・文献紹介「内面性の教育と『新しい学力観』」 .....	81
資料1 調査票見本（調査レポート） .....	86
資料2 学年・性別集計表（調査レポート） .....	96

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# 成績モノカルチャー

静岡大学教授  
深谷昌志

## 成績のよさは打ち出の小槌

学校へ行って勉強をする。そして、少しでもよい点を取ろうとする。そのこと自体は決して悪いことではない。というより、長い間、子どもたちは一生懸命に勉強するようにといわれて成長してきたように思う。

そして、子どもたちはおとなたちのそうした期待に添うように努力してきた。そして、思うように成績が上がらないと、学習塾へ通うなどをして、成績アップに努めている。それはよいのだが、このところ「成績をよくする」が子どもたちの中に大きな比重を持ちすぎているように思う。

子どもたちが学業の持つ意味をどのようにとらえているかは、図1の結果が端的に示している。これは、子どもたちに勉強の得意な子と苦手な子とをイメージさせ、その子がどのような人生を送りそうなのかを推定させた結果を示している。

図から明らかのように、子どもたちは勉強が得意な子は大きくなったら、「知識や技術の必要な仕事につく」や「社会の人から尊敬される仕事につく」ことが可能だ。しかし、

勉強が苦手だと社会的な達成はむろんのこと、しあわせな家庭をつくるのもむずかしいだろうという。

小学生時代の成績の良し悪しが一生を規定するように思う。こうした見方は子どもらしさのあらわれであり、社会的な見方の成熟する中学生ともなれば、もう少し視野が広がり、成績のよさをそれほど過大評価しなくなるとも考えられる。そこで、同じ設問を用いて、中学生の反応を調べると以下のとおりとなる。

	勉強の 得意な子 (A)	苦手な子 (B)	(A)/(B)
①社会に役立つ人	45.2%	5.0%	9.0倍
②社会的に尊敬される	28.2%	5.5%	5.1倍
③金持ちになり 広い家に住む	18.5%	5.8%	3.2倍
④いい父(母) になる	40.8%	29.3%	1.4倍
⑤みんなから好 かれる (「ぜったい+たぶんなれると思う」割合)	32.7%	22.7%	1.4倍

したがって、小学生だけでなく中学生たちも、成績の良し悪しが未来を規定すると信じているのは確かのように思える。しかも、念のために補足しておくなら、

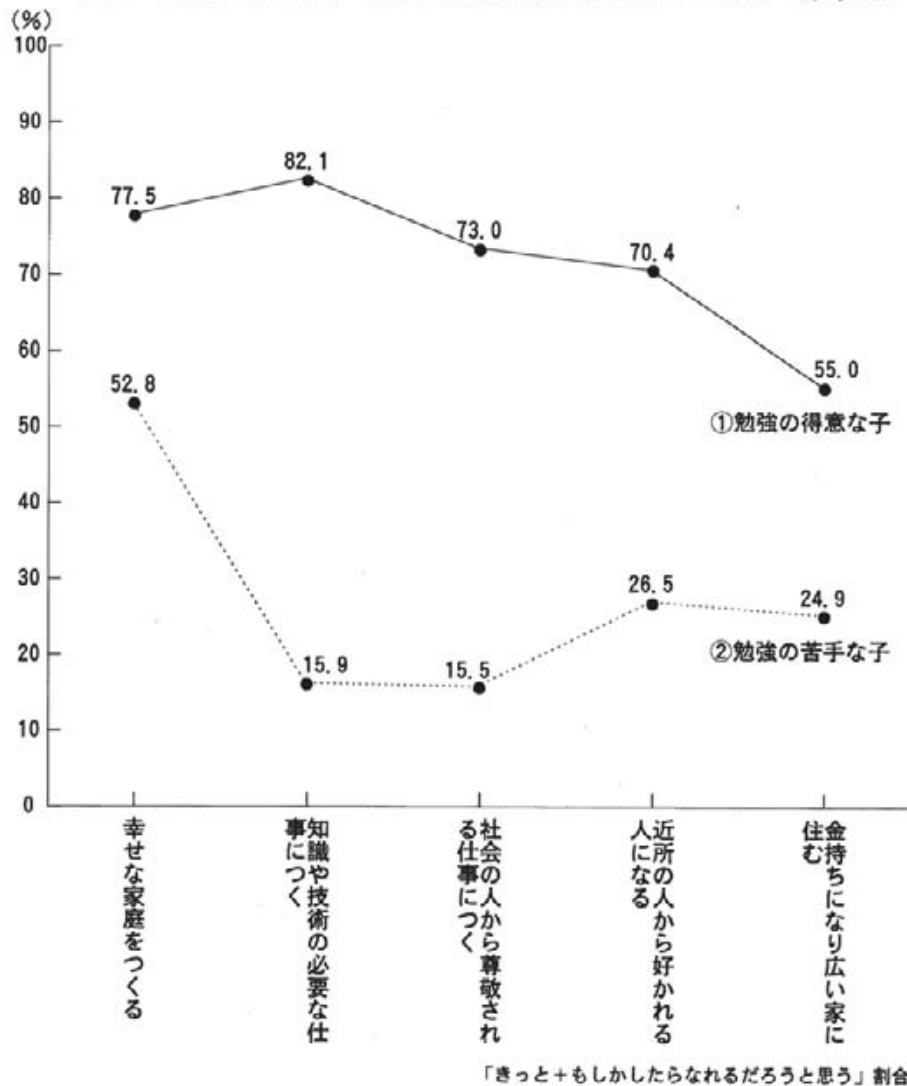
- ①成績のよさを高く評価する態度は、高校生の間にも定着している。
- ②しかも図1のような見方は、成績についての一般的な理解にとどまらない。つまり、自分の成績と未来像との関連についても成績のよい子の未来像が明るく、成

績がふるわなくなると、未来像は暗さを増すなどの結果が得られている。

の傾向が顕著である。もちろん、高校生になると、偏差値によって進学先が異なるので、小・中学生のように、成績によって意識が異なることとはいえなくなり、進学先のランクが問題となる。

- そこで仮に、
- ①大学進学率が7割以上で、いわゆる一流大学の入学者が3割以上——Aランク

図1 勉強の得意な子・苦手な子はどんな未来を送りそうか（小学生）



- ②進学率が4～6割、一流大学進学は2割前後—————Bランク
  - ③進学率が3～4割—————Cランク
  - ④進学率が2割以下—————Dランク
- のように、高校にランクをつけ、生徒たちの学業意識を調べると、以下のとおりとなる。

①むずかしい大学へ入れそうと思う割合

A=41% B=27%  
C=15% D=2%

②なるならないは別として、がんばれば高級官僚になれると思う割合

A=30% B=20%  
C=14% D=7%

③がんばれば医師になれると思う割合

A=38% B=22%  
C=18% D=14%

こうしたデータを重ね合わせると、

成績のよさ→よい学校への進学→社会的な達成が可能になる→しあわせな未来

といった図式を、小学生はむろんのこと、中学生や高校生も信じているように考えられる。

いずれにせよ、子どもたちは成績の良し悪しがすべてを可能にする打ち出の小槌のように思っている。そうであるから、子どもたちは打ち出の小槌を手にしたいと学習努力を重ねる。

### 成績は努力の反映

このように、子どもたちはよい成績をとることを大事に考える態度を身につけているが、それならば、よい成績をとるにはどうすればよいと思っているのか。その手がかりを表1に示した。

小・中学生の間に多少の開きが認められるが、いずれにせよ、生まれつき勉強が得意、あるいは苦手ということはない。成績のよい子どもは授業を熱心に聞き、帰宅後、まじめに予習や復習をするからよい成績がとれる。それに反し、勉強の苦手な子は授業をまじめに聞かない上に、家庭学習を怠けているから

悪い成績をとるはめになる。つまり、子どもたちは成績の良し悪しを学習努力の反映とみなしている。

あらためてふれるまでもなく、学習の可能性については予想される以上に個人による開きがみられる。もちろん、学習努力を重ねることにより、どの子どもその子なりに学習成果を上げることができる。したがって、どの子どもにも教育の可能性が存在するのは確かであろう。しかし、だからといって、それは結果の平等を意味するのではないのも事実であろう。

しかし、上述したとおり子どもたちは学業成績は学習努力を反映すると信じている。そして、親たちも「学業成績は家庭での勉強の度合いを反映する」との見方に、

①そう思う	43.6%	}	93.5%
②ややそう思う	49.9%		
③あまりそう思わない	4.7%	}	6.5%
④そう思わない	1.8%		

と答えている。したがって、努力至上主義にも似た子どもたちの成績についての見方は、親たちの意識を子どもたちが内在化した結果とも考えられる。

このように、子どもたちは学習努力が成績に反映されると信じているので、

勉強の得意な子＝ねばり強く頼りになる子  
勉強の苦手な子＝あきっぽく頼りにならない子

といったイメージを抱くことになる。そうした指摘を裏づけるかのように、自分自身についても図2に示したとおり、勉強の得意な子は努力が報いられるので、まじめな努力型で、みんなから信頼され、リーダーシップがあると、明るい自己像を抱くことができる。それに対し、勉強の苦手な子は、努力の足りない、仲間から信頼されていない、将来大したことができそうもないといっただめな自分を自己像として感じる結果を招く。

そうした自己像の暗さを示す例証として、いくつかの設問結果を学業成績とクロスさせ

て示すと、以下のような数値が得られる。

- 成績が上位 中位 下位
- ①自分つまらない人  
間だと思ふ 16% ≧ 15% < 31%
- ②自分なんか生まれて  
こなければよかった 20% < 26% < 46%
- ③幼稚園のころにもど  
りたいと思ふ 14% < 22% < 38%
- (「わりと+いつもそう思う」割合)

### 授業のわかる子の割合

このように、子どもたちは成績のよさがまじめな学習態度に裏打ちをされていると考えている。そうであるから、

まじめな学習態度→成績のよさ→自己像の明るさ(自信がつく)→よい学校へ進学→明るい未来像

表1 勉強が得意・苦手の理由

(%)

			そう思う			やや そう 思う	そう思わない		
			とても	かなり	小計		あまり	ぜんぜん	小計
勉強の得意な子	授業をまじめに聞いているから	小学生	52.8	29.3	82.1	14.1	2.0	1.8	17.9
		中学生	43.1	31.9	75.0	15.2	5.3	4.5	25.0
	予習や復習をしっかりしているから	小学生	52.1	26.8	78.9	15.8	2.2	3.1	21.1
		中学生	30.2	31.2	61.4	24.3	9.2	5.1	38.6
	生まれつき勉強が得意だから	小学生	17.0	16.0	33.0	41.0	7.8	18.2	67.0
		中学生	10.0	13.4	23.4	26.1	29.9	20.6	76.6
勉強の苦手な子	授業をまじめに聞かないから	小学生	34.1	29.1	63.2	20.9	11.9	4.0	36.8
		中学生	43.3	27.8	71.1	19.6	5.4	3.9	28.9
	家で勉強をしないから	小学生	45.3	28.5	73.8	18.2	5.5	2.5	26.2
		中学生	33.5	28.5	62.0	25.6	7.4	5.0	38.0
	もともと勉強が苦手だから	小学生	13.0	9.2	22.2	16.5	21.1	40.2	77.8
		中学生	18.3	17.8	36.1	28.8	20.0	15.1	63.9

設問「勉強の得意な(苦手な)友だちはどうしてそうなのだと思いますか」

といった論理が成り立ってくる。

事実、中学生たちは、

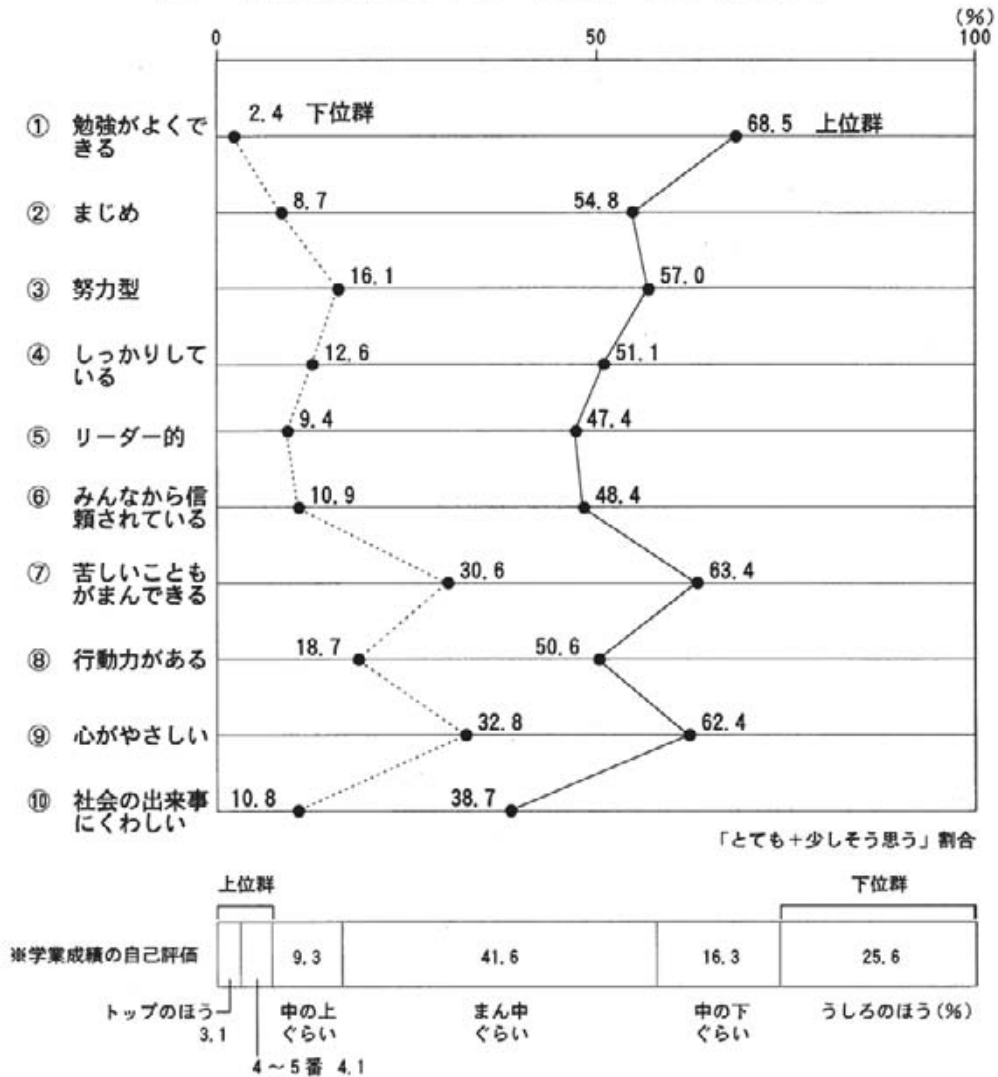
- ①成績がよくなったら ぶえる 変わらない へる  
 自分に対する自信 48% : 50% : 2%  
 先生との話しやすさ 25% : 73% : 2%  
 友からの信頼 9% : 87% : 4%
- ②成績が悪くなったら  
 自分に対する自信 2% : 50% : 48%  
 先生との話しやすさ 2% : 73% : 25%  
 友からの信頼 2% : 88% : 10%

と、成績の上下は、自分の自信につらなることと答えている。

それだけに、学業成績に対する自己評価がどのように分布しているのかが気になりとなる。表2から明らかなように、成績に自信をもつ子の割合は、学年が上がるにつれて減少の傾向を示し、中学生になると、「やや上」を含めても、勉強に自信をもてる生徒の割合は4分の1を割り、苦手意識を抱く者が半数に迫り始める。

こうした資料を読んでいると、学校は成績

図2 成績上位群と下位群の自己像の比較（中学生）



競争を通して、子どもたちの自信を喪失させる淘汰機関なのではないかという疑問がつのってくる。

そうした感慨はともあれ、子どもたちは成績のよさをめざして努力を重ねる。しかし学年を追うにつれて、そうした努力が報いられずに、成績のよさを求める態度を放棄する子どもが増加していく。それと同時に、そうしたタイプの子は、テレビやマンガに束の間のやすらぎを求める生活を送り始める。このような成長のスタイルを考えると、子どもたち

の成長が学業成績によって左右される、いわば、学業成績モノカルチャーのような印象を受ける。成長の中で、成績が持つ比重が大きすぎるのではないか。友情にあつい、スポーツが得意、何ごとにつけがなばるなど、さまざまな側面の中の1つとして、学力を位置づけるべきではないか。子どもの成長をトータルとしてとらえ、バランスのよい成長を考える。そうした必要性が感じられてならない。

表2 成績の自己評価の学年別推移

	トップ クラス	上のほう	やや上	中くらい	やや下	下のほう	ずっと下
小学4年	8.5 — 9.5 18.0		18.6	43.8	8.3	7.3 — 3.4 10.7	
5年	6.7 — 9.0 15.7		20.1	40.3	11.6	8.5 — 3.8 12.3	
6年	5.8 — 8.4 14.2		22.8	36.2	12.2	10.5 — 4.1 14.6	
中学1年	4.6 — 8.8 13.4		14.6	35.8	21.2	10.5 — 3.4 13.9	
2年	4.3 — 5.3 9.6		13.2	32.1	17.2	16.2 — 9.2 25.4	
3年	2.8 — 8.2 11.0		10.6	32.8	20.1	12.0 — 12.6 24.6	





〔調査レポート〕

# 学業成績の持つ意味

静岡大学教授 深谷昌志  
埼玉県立小川高校教諭 三枝恵子



# 調査レポート

## 学業成績の持つ意味

### 要約

#### 1. 家庭学習の長さ

32%の子どもが「ほとんど毎日」勉強をしており(表1)、1時間前後勉強している子はほぼ4割を占める。(表2)



#### 2. 学業成績

子どもたちの自己評価によると、成績が「上のほう」が8%、「まん中より上」が26%、「まん中くらい」が48%である。(表6)



#### 3. 勉強のできる子のイメージ

塾へ通い、予習や復習をしている子で、授業をよく聞いている子。(図4)

#### 4. 苦手を克服するのに

授業をよく聞き、予習や復習をすることで、マンガを読まないなどと思わなくてよい。(図7)

#### ●調査概要

1. 調査主題 学業成績の持つ意味
2. 調査視点 勉強の得意な子、苦手な子のイメージ、自己像、将来像などを明らかにし、成長の中で成績が持つ比重が大きすぎ

る現在において、子どもたちのバランスのよい成長を考えていく。

3. 調査項目 成績の自己評価、1日の勉強時間、自己像、勉強のできる子のイメージ、苦手を克服するには、両親の勉強への関心度、将来の進路、など。

## 5. 学業成績と自己像

成績のよい子どもほど、自分のことを友だちが多く、運動が得意で、家の手伝いをしていると思っている。(表12)



## 6. 将来の進路と学業成績

成績の上位の子の52%は「むずかしい大学」への進学を望んでいる。しかし、「まん中くらい」になると、「むずかしい大学」への希望は8%とへり、52%が「わからない」と答えている。(表16)

## 7. 友だちの数と学業成績

成績のよい子どもたちは、いろいろのことを話せる友だちが多いと自分を思っている。(表18)

## 8. 両親の関心度

多くの母親は「しょっちゅう勉強しなさい」という。(表20)

### 〔まとめ〕

勉強の得意な子どもたちの自己像は明るい。かんばんやで、スポーツが得意だし、友だちも多いと自分を評価している。そのこと自体は悪いことではないと思う。しかし、その反面、勉強の苦手な子どもたちの自己像が暗いのが気になりとなる。子どもころ、算数が苦手でもかまわないと思うのに、子どもたちは自分を駄目

な人間だと思っている。

勉強ができてできなくても、自分に誇りを持って生きていける。そうした指導を現在の学校に期待するのは無理なのであろうか。


ちなみに、勉強に苦手意識を持つ子どもは、全体の19%、「まん中くらい」の子を含めると66%に達する。

4. 調査時期 1992年1月～2月  
 5. 調査対象 東京に住む小学校5・6年生  
 6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

## 7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
5年	298	289	587
6年	456	390	846
計	754	679	1,433

---



## はじめに

子どもたちの塾通いはさかんになるばかりだ。特に、私立中学を目指す子どもの中には、近くの塾に週に2～3回通うのに加え、日曜日に模擬試験を受けたりする生活を送る子の姿もみられる。しかも、そうした子どもが少数に限らず、かなりの広がりを見せているのは周知の通りである。

本調査は、こうした学習環境にある子どもたちにとっての学業成績の意味を、子どもの自己像との関わりや親、先生、友だちなど、子どもたちの学習を支えている環境から分析をしようと試みたものである。

# 1. 学習の実態



## ● 1日の家庭学習)))

ここでは、今回調査対象となった子どもたちの家庭学習のようすや、塾通い・中学受験の実態や教科のイメージなど調査の概要を示した。

まず、表1はふだんの日に宿題以外の家庭学習をどのくらいしているのかをたずねたものである。「ほとんど毎日する」という子は32.2%。「1週間に5～6日くらいする」を合わせると約5割の子どもたちが宿題以外の勉強をほぼ毎日勉強していることになる。表2は1日の平均の勉強時間（宿題も含む）を示した。「1時間くらい」勉強する子は28.3%、「1時間半くらい」勉強している子は16.4%、「3時間以上」勉強する子も12.9%いる。

さらに、5年生で「3時間以上」勉強する

子は8.9%であるが、6年生になると15.7%とほぼ2倍となってくる。小学6年生ということを考えれば、かなりハードな勉強量ではないだろうか。

では、子どもたちはどんな内容を勉強しているのだろうか。表3によると、「予習も復習もしている」子は36.4%、「宿題だけしている」子は25.4%、「おもに復習をしている」子は24.4%、「おもに予習をしている」13.8%と、それぞれが思い通りの勉強に取り組んでいるようである。しかし、学年が進むにつれ、わずかだが宿題だけでなく、予習・復習にも力をそそいでいるようすがうかがえる。

勉強時間を成績との関係でみると、「3時間以上」やっている子は成績の上位の子では

38.7%、中の上位の子で18.7%、下位の子でも18.5%とかなり長時間勉強しているようす

がみられる。また、下位の子では「ほとんどしない」と答えた子が最も多く21.5%いる。

表1 ふだんの日（月曜日から金曜日まで）の家庭学習（宿題以外の）

		(%)				
		ほとんどしない	1週間に1~2日くらいする	1週間に3~4日くらいする	1週間に5~6日くらいする	ほとんど毎日する
全	体	13.3	16.1	23.7	14.7	32.2
男	子	15.9	16.2	22.5	13.4	32.0
女	子	10.3	15.9	25.0	16.2	32.6

表2 1日の勉強時間

		(%)								
		ほとんどしない	30分以下	30分くらい	1時間くらい	1時間半くらい	2時間くらい	2時間半くらい	3時間くらい	3時間以上
全	体	2.9	3.5	13.3	23.3	16.4	12.3	7.6	7.8	12.9
性	男子	3.9	4.1	14.9	22.1	15.5	12.2	7.1	5.9	14.3
	女子	1.8	2.9	11.6	24.7	17.3	12.5	8.1	9.8	11.3
学 年	5年	1.9	3.6	13.8	26.3	16.2	13.5	7.8	8.0	8.9
	6年	3.6	3.5	13.0	21.1	16.5	11.6	7.4	7.6	15.7
成 績	上のほう	0.9	1.9	9.3	17.6	10.2	6.5	5.6	9.3	38.7
	まん中より上	1.1	2.7	8.4	20.8	17.1	10.0	11.4	9.8	18.7
	まん中くらい	1.8	3.6	14.6	25.8	18.1	14.4	7.1	7.5	7.1
	まん中より下	4.3	5.9	19.7	24.3	17.6	13.3	4.8	4.8	5.3
	下のほう	21.5	4.1	13.5	18.9	4.1	13.5	4.1	6.8	13.5

表3 家での勉強の内容

(%)

	全 体	男 子	女 子	5 年	6 年
1. おもに予習をしている	13.8	14.7	12.8	12.7 <	14.6
2. おもに復習をしている	24.4	20.1	29.1	22.3 <	25.8
3. 予習も復習もしている	36.4	36.1	36.8	35.4 <	37.1
4. 宿題だけしている	25.4	29.1	21.3	29.6 >	22.5

## ●塾・中学受験)))

家庭での学習において、学習塾、中学受験の問題は欠かすことができない。

図1は子どもたちが「塾に行っているか」をたずねたものである。「現在塾に行っている」と答えた子は52.8%、「行ったことがない」子は35.2%。「以前に行ったことがある」子を合わせると、約6割強の子どもたちが学習塾通いの経験を持つことになる。表は省略したが、性差や学年差はほとんど見られなかった。では、学習塾に通っているようすを見てみたい。表4より1週間に「3日」通っている子が27.5%、「4日」通っている子が25.2%である。家庭教師については図2の通りである。

私立や付属中学受験希望は図3に示した。「受験する」と答えた子は29.6%にも達している。図は省略したが、「中学受験」を希望している子の通塾率は88.8%、家での勉強時間は3時間以上する子が39.7%である。現在の中学受験の過熱状況からすれば、当然のことかもしれない。

子どもたちは学校で6時間勉強した後、さらに1日平均1時間～1時間半の勉強をし、学習塾に1週間に3～4回通い、学習塾から帰宅後さらに勉強し、中学受験に挑戦しと、かなり緊張した生活をしているようすが想像できる。

図1 通塾率

(%)

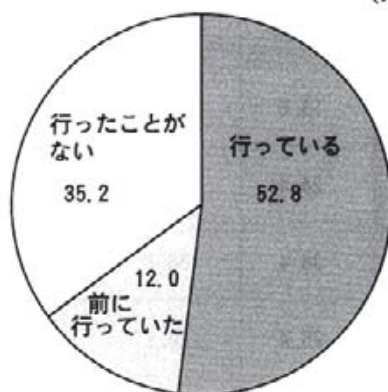


表4 1週間のうち塾に行っている日数  
(塾に行っている人の中で)

(%)

	1日	2日	3日	4日	5日	6日	毎日 (7日)
全体	6.5	21.6	27.5	25.2	12.1	5.2	1.9
男子	5.0	23.1	25.1	25.5	15.1	4.0	2.2
女子	8.4	19.9	30.5	24.7	8.4	6.6	1.5



図2 家庭教師を頼んでいるか

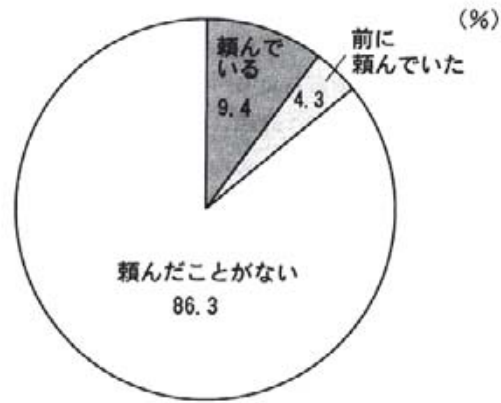
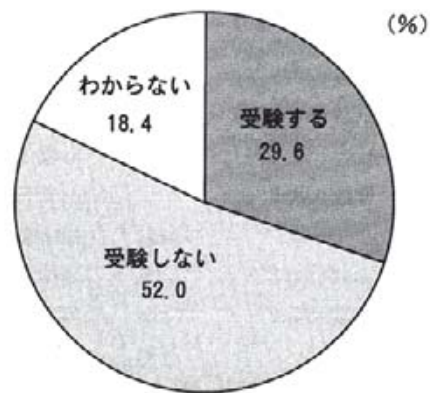


図3 私立や付属の中学を受験するか



## ●教科イメージ)))

さて、子どもたちは教科についてどんなイメージを持っているのだろうか。子どもたちにとって、教科の好き嫌い、得意・苦手意識など教科イメージは重要な関心事である。もちろん教科によって大切さの比重に違いがあるわけではない。図画工作や音楽・体育も人間として成長するためには重要な役割を果たしているはずである。しかし、成績というと国語・算数の成績を連想する子が多いことも事実である。ここではそんな子どもたちの教科イメージを探ってみたい。

表5は教科イメージを家庭学習との関わりから国語・社会・算数・理科の4教科に限ってたずねたものである。

- ・一番好きな教科——算数(30.8%)
- ・嫌いな教科——算数(30.5%)
- ・得意な教科——算数(30.9%)
- ・苦手な教科——算数(33.3%)
- ・将来生活に役立つ教科——社会(39.1%)
- ・一番むずかしい教科——算数(38.6%)
- ・成績がよいと一番うれしい教科——算数(54.3%)
- ・家で一番勉強する教科——算数(64.2%)
- ・勉強しなくてもわりとよい成績のとれる教科——理科(31.3%)
- ・成績が悪くても、わりとへいきな教科——理科(54.9%)

算数は3人に1人は苦手意識を持ち、嫌いな教科と考えているようである。むずかしく、苦手な教科であるから家庭でも一生懸命勉強し、それゆえ成績が上がったときのうれしさも格別な思いがあるのだろう。

男女別では、女子は国語が一番好きであり(34.2%)、男子は算数が好きである(34.7%)。得意な教科では女子は国語(42.0%)、男子は算数(36.8%)である。嫌いな教科、苦手な教科も同様に、男子は国語、女子は算数である。家で一番勉強する、一番むずかしい教科、成績がよいと一番うれしい教科では男女とも算数である。

学年差では、6年生のほうが算数に苦手意識を抱く子どもが増え、国語では減少する傾向である。

こうした数値からも国語と算数は子どもたちの学習の中心を占める重要な教科と考えていることがわかる。

子どもたちの最も関心の深いところは勉強の結果、すなわち評価であると思う。子どもたちが自分の成績について自己評価すると、表6のようにまとめられる。子どもたちは自分自身のことを過小評価する傾向があると言われるが、今回の調査では比較的よい評価をしているように思う。特に教科別では、それぞれに得意科目を持つ子どもたちがおり、高い評価を示していることが想像できよう。

表5 教科観

(%)

		国語	社会	算数	理科
1. 一番好きな教科	全体	22.0	21.6	(30.8)	25.6
	男子	11.2	27.1	34.7	27.0
	女子	34.2	15.4	26.4	24.0
2. 将来生活に役立つ教科	5年	20.1	18.0	35.7	26.2
	6年	23.3	24.1	27.5	25.1
	全体	23.1	(39.1)	34.8	3.0
3. 勉強しなくてもわりとよい成績のとれる教科	男子	20.9	42.7	32.7	3.7
	女子	25.6	35.2	37.1	2.1
	5年	26.6	38.4	32.8	2.2
4. 一番むずかしい教科	6年	20.8	39.6	36.2	3.4
	全体	29.8	20.5	18.4	(31.3)
	男子	21.6	23.4	23.4	31.6
5. 家で一番勉強をする教科	女子	39.1	17.2	12.9	30.8
	5年	23.0	22.3	19.6	35.1
	6年	34.6	19.2	17.6	28.6
6. 成績がよいと一番うれい教科	全体	19.5	25.2	(38.6)	16.7
	男子	28.5	22.7	31.4	17.4
	女子	9.4	27.9	46.8	15.9
7. 成績が悪くても、わりとへいきな教科	5年	24.1	20.3	40.1	15.5
	6年	16.3	28.5	37.6	17.6
	全体	24.1	8.1	(64.2)	3.6
8. 得意な教科	男子	23.5	9.6	61.9	5.0
	女子	24.7	6.4	66.8	2.1
	5年	25.0	6.6	65.1	3.3
9. 苦手な教科	6年	23.4	9.1	63.7	3.8
	全体	23.0	15.4	(54.3)	7.3
	男子	30.1	15.1	46.4	8.4
10. 嫌いな教科	女子	15.0	15.7	63.2	6.1
	5年	25.9	11.0	55.5	7.6
	6年	21.0	18.4	53.5	7.1
11. 勉強が苦しい教科	全体	14.2	23.7	7.2	(54.9)
	男子	16.3	24.4	8.7	50.6
	女子	11.9	22.9	5.6	59.6
12. 得意な教科	5年	14.0	24.2	7.7	54.1
	6年	14.3	23.3	6.9	55.5
	全体	27.3	19.7	(30.9)	22.1
13. 得意な教科	男子	14.4	24.8	36.8	24.0
	女子	42.0	13.9	24.1	20.0
	5年	24.6	17.6	35.5	22.3
14. 得意な教科	6年	29.2	21.2	27.6	22.0
	全体	22.8	24.2	(33.3)	19.7
	男子	31.7	20.4	28.4	19.5
15. 得意な教科	女子	12.9	28.3	38.9	19.9
	5年	27.0	22.3	31.1	19.6
	6年	20.0	25.4	34.9	19.7
16. 嫌いな教科	全体	22.1	26.0	(30.5)	21.4
	男子	31.5	22.9	23.8	21.8
	女子	11.7	29.5	37.9	20.9
17. 嫌いな教科	5年	26.5	24.6	29.1	19.8
	6年	19.1	27.0	31.5	22.4

表6 成績

(%)

	上のほう	まん中より上	まん中くらい	まん中より下	下のほう
全体の成績	7.7	26.2	47.5	13.4	5.2
国語	14.7	23.9	40.9	14.8	5.7
社会	14.3	22.7	38.0	17.7	7.3
算数	17.4	21.7	35.6	16.8	8.5
理科	12.5	22.9	42.5	17.2	4.9
体育	19.4	21.9	36.2	14.3	8.2
音楽	13.9	23.2	39.7	16.3	6.9
図画工作	14.9	25.3	41.9	13.4	4.5
家庭科	13.5	26.5	40.0	14.0	6.0

## 2. 得意と苦手の克服



子どもたちは誰でもこれから始まる学校生活に夢と希望を抱いて小学校に入学してくることだろう。ところが学校生活が進むにつれ、

教科に対し得意と苦手意識、成績の良し悪しを体験することになる。

### ●勉強のできる子のイメージ)))

図4は子どもたちに「勉強のできる子」を想定させ、子どもたちの抱く「勉強のできる子のイメージ」をたずねたものである。その結果、子どもたちが抱く勉強のできる子とは、1位は「塾に行っている子」で「とてもそう」と答えた子は68.7%、「わりとそう」を合わせると約8割にも達する。次に「予習・復習をする子」で47.7%、「授業中先生の話の聞いている子」では37.9%と、いずれも授業中や家庭学習での「まじめさと努力」をあ

げている。

では、教科の得意・苦手意識との関係はどうであろうか。ここでは算数と国語の得意・苦手意識を持つ子どもたちを中心に「勉強のできる子のイメージ」上位3項目について比較すると、

1. 塾に行っている子	得意	苦手
国語	68.9%	> 64.8%
算数	73.6%	> 64.8%

2. 予習・復習をする子	得意	苦手
国語	46.1%	> 42.8%
算数	47.0%	< 50.0%
3. 授業中先生の話 聞いている子	得意	苦手
国語	38.6%	> 35.5%
算数	41.8%	> 36.8%

と、得意群のほうがより「まじめと努力」が必要であると認めている。こうした成績の良し悪しの「まじめに努力する子」という考え方は性別（図5）でも、ほぼ一致した子どもたちの見方のようなのである。成績との関係では、成績の上位者に、より「まじめに努力する子」のイメージが強い（表7）。

ただ、学習塾への子どもたちの依存と期待の大きさには驚かされる思いがする。

図4 勉強のできる子のイメージ

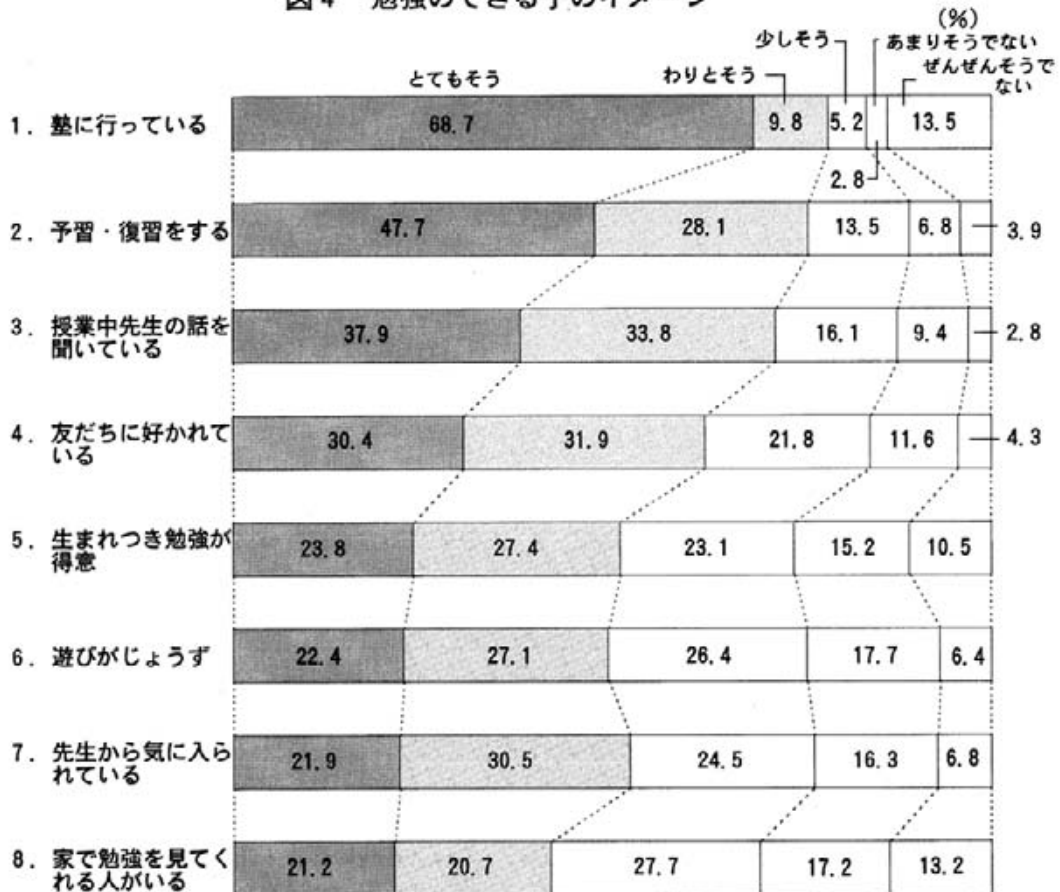


図5 勉強のできる子のイメージ × 性別

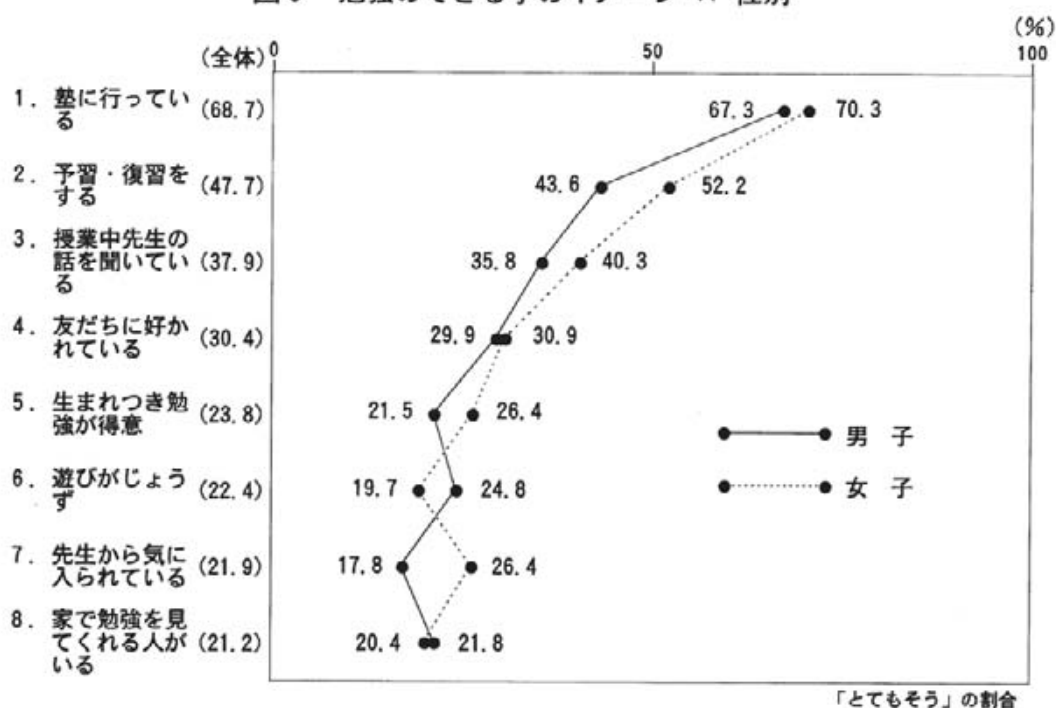


表7 勉強のできる子のイメージ × 成績

	全体 (%)	上のほう (%)	まん中より上 (%)	まん中くらい (%)	まん中より下 (%)	下のほう (%)
1. 塾に行っている	68.7	74.3	73.0	67.8	63.8	60.3
2. 予習・復習をする	47.7	47.7	50.0	47.3	47.0	42.5
3. 授業中先生の話聞いてる	37.9	37.6	42.3	36.7	35.8	35.6
4. 友だちに好かれている	30.4	34.3	30.5	30.1	30.5	27.8
5. 生まれつき勉強が得意	23.8	29.6	25.0	21.3	25.0	26.0
6. 遊びがじょうず	22.4	33.0	21.7	21.2	18.8	27.4
7. 先生から気に入られている	21.9	28.7	23.2	19.6	22.2	23.6
8. 家で勉強を見ってくれる人がいる	21.2	31.8	21.6	18.4	21.5	25.7

「とてもそう」の割合

## ●小学2～3年生のころと比べて))

では、子どもたちは小学2～3年生のころと比べ、どのような学習の変化が見られるのだろうか。

図6は、小学2～3年生のころと比べ、勉強のむずかしさや両親・先生の関わりの変化

をたずねたものである。「勉強がむずかしくなった」と「とてもそう」思う子は39.4%、

「テストの点数を気にするようになった」で

は32.5%、「宿題をきちんとやっている」

31.8%、「お父さん・お母さんが勉強のこと





でうるさく言うようになった」30.3%。5～6年生ともなると勉強がむずかしくなり、テストの点数を気にするようになり、それゆえ宿題をきちんとやり、予習・復習をきちんとし、まじめに努力している小学生像が浮かんでくる。そして、父親・母親は勉強のことでするさく言うようにもなる。

表8は成績との関係を示した。成績の上位の子どもは宿題をきちんとやり、まじめに努力し、予習・復習もきちんとやっている。そ

して、テストの点数もとても気にするようになり、両親に勉強を見てもらったり、先生に質問に行くなど、勉強への積極的な姿勢が見られる。その結果として、成績もよくなったと感じているようである。成績の下位の子どもは勉強がよりむずかしくなったと「とても」思っているが、宿題や予習・復習への努力不足が感じられ、先生に質問に行く積極さにも乏しいものがある。

表8 2～3年生のころと比べて × 成績

(%)

	上のほう	まん中より上	まん中くらい	まん中より下	下のほう
1. 勉強がむずかしくなった	27.8 <	34.2 <	40.1 <	49.2 <	52.1
2. テストの点数を気にするようになった	39.8	37.1	29.8	29.6	31.5
3. 宿題をきちんとやっている	46.8	39.6	29.5	18.5	23.6
4. お父さんやお母さんに勉強のことでするさく言われるようになった	37.6	32.1	26.9	31.4	31.5
5. 先生が遊んでくれなくなった	29.2	27.1	24.5	25.9	23.6
6. 予習・復習をきちんとしている	39.4	23.7	13.4	7.4	17.8
7. 成績がよくなった	52.8	25.5	9.9	3.7	5.6
8. まじめに努力している	42.2	19.0	9.8	7.4	13.9
9. お父さんやお母さんが勉強を見てくれる	23.9	14.1	9.6	11.1	12.5
10. 先生に質問することがふえた	15.6 >	11.0 >	8.5 =	8.5 >	2.7

小学2～3年生のころに比べ  
今のほうが「とてもそう」の割合

## ●中学生になったら))

では、今後成績や勉強時間の量はどうか変化していくのだろうか。成績と勉強量についての今後の見通しを、中学生生活を想定させ、たずねてみた。表9は「中学生になったら1日の勉強時間はどのくらいふえると考えているか」をたずねたものである。「1時間くらいふえる」とする子は28.1%、「1時間半くらいふえる」は19.7%、「2時間くらいふえる」とする子は19.6%である。現在、1時間から1時間半の勉強をしている子どもたち(P.14表2)が、中学生になったら2時間から3時間半くらいの勉強量を予測しているようである。子どもたちは中学生になると、学校で6時間授業をして、2～3時間半の家庭学習と塾通い、さらに放課後の部活動も課せられるという予想以上に厳しい毎日が想像される。

勉強量に対し、成績はどうかと考えているのだろうか。表10によれば「かわらない」と思う子が38.9%、「ずっと・少しよくなっ

ている」と思う子が36.1%、「少し・うんと下がっている」と思う子は25.0%いる。これを成績との関係で見ると、

成績	ずっとよくなっている	少しよくなっている
上位の子	17.4%	35.8%
	53.2%	
中くらい	1.7%	32.5%
	34.2%	
下位の子	2.7%	12.2%
	14.9%	

成績の上位の子どもの約5割が成績がよくなっていると見通しており、中学生生活に希望を持っている姿が想像される。しかし、成績の下位の子どもたちにとっての中学生生活は、成績においては一層厳しく、悩みの多い日々が予想される。

表9 中学生になったら、今よりどのくらい勉強するか

(%)					
ほとんどかわらない	30分くらいふえる	1時間くらいふえる	1時間半くらいふえる	2時間くらいふえる	3時間以上ふえる
9.5	12.2	28.1	19.7	19.6	10.9

表10 中学生になったら、成績は

(%)				
ずっとよくなっているだろう	少しよくなっているだろう	かわらないと思う	少し下がっているだろう	うんと下がっているだろう
4.3	31.8	38.9	19.7	5.3

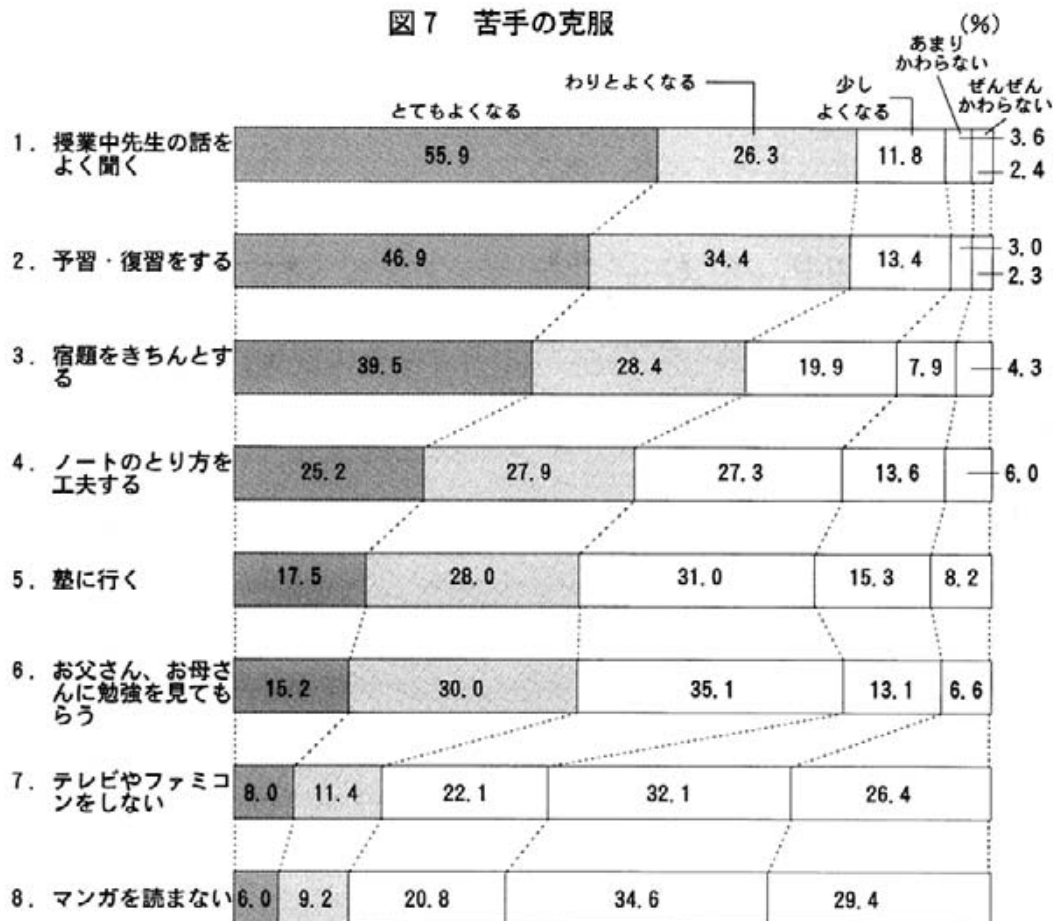
## ●苦手の克服)))

成績のよい子は「まじめに努力している子」というのが子どもたちのほぼ一致した見方であった。では、成績の悪い子は学業にどんな取り組み方をしているのだろうか。多少努力や積極さに欠けるとしても、本当に「努力していない子」といえるのだろうか。成績の下位の子でも、1日平均3時間以上勉強している子が13.5%もいるのにである（P.14表2）。

図7は子どもたちの考える苦手の克服方法

である。成績が「とてもよくなる」ためには「授業中先生の話をよく聞く」（55.9%）、「予習・復習をする」（46.9%）、「宿題をきちんとする」（39.5%）などが高い数値を示している。これらは、「わりと・少しよくなる」を合わせると、約9割以上の子どもたちが考える勉強ができるようになるための方法である。つまり、勉強がよくできるようになるためには、先生の言われたことをきちんとやり、自分でも計画をたて、自主的に積極的

図7 苦手の克服



に勉強に励む子どもたちのことである。そして、塾やお父さん、お母さんにも勉強を見てもらうことも必要なことと考えている。

女子のほうが男子に比べ、わずかであるがこの傾向は高い(図8)。

もう少し数値を追ってみたい。表11は苦手克服を成績との関係でみたものである。成績の上位の子どもは「授業中先生の話をよく聞く」「予習・復習をする」「宿題をきちんとする」「ノートのとり方を工夫する」などを

することで成績はよくなると考えている。成績の下位の子どもは「塾に行く」「テレビやファミコンをしない」「マンガを読まない」などが必要と考えている。

成績のよい子のイメージでは「塾に行っている子」が高い数値を示したが、成績をよくするためには塾より学校の授業を真剣に聞き、ノートのとり方を工夫し、家で予習・復習や宿題をきちんとすることが大切であると考えている。

図8 苦手克服 × 性別

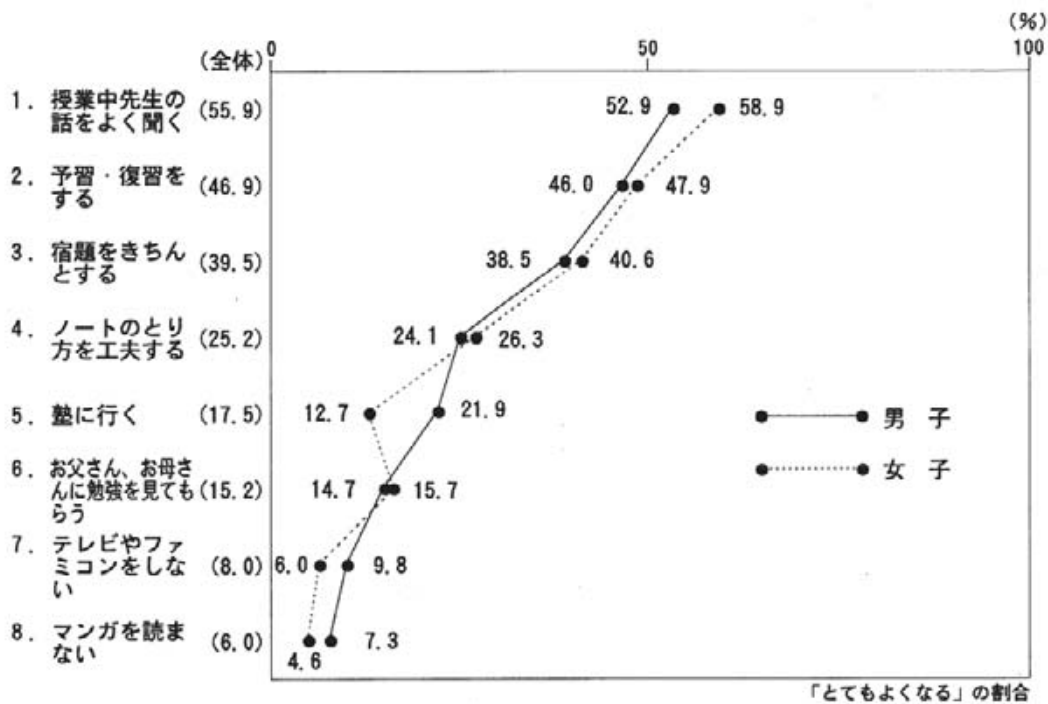


表11 苦手の克服 × 成績

(%)

	全 体	上 の ほう	まん中 より上	まん中 くらい	まん中 より下	下 の ほう
1. 授業中先生の話をよく聞く	55.9	66.7 ←	57.9	55.4	50.3	47.9
2. 予習・復習をする	46.9	51.4	55.2	44.1	41.9	37.0
3. 宿題をきちんとする	39.5	39.4	39.4	39.5	39.2	37.0
4. ノートのとり方を工夫する	25.2	37.0 ←	26.1	23.5	21.2	17.8
5. 塾に行く	17.5	20.4	16.6	17.5	14.5	23.6
6. お父さん、お母さんに勉強を見てもらう	15.2	18.3	16.3	14.7	12.4	15.3
7. テレビやファミコンをしない	8.0	8.3	6.3	6.3	8.1	13.7
8. マンガを読まない	6.0	6.4	4.9	6.2	4.9	12.5

「とてもよくなる」の割合

### 3. 自己像をめぐって



今までは、成績のよい子のイメージと苦手の克服を学級の中で比較的客観的にとらえてきた。子どもたちは「学校の授業をしっかり聞き、宿題をやり、自分で計画的に予習・復習を行い、積極的に勉強する子」、すなわち「努力する子＝成績のよい子」であるという

見方ではほぼ一致していた。

ここではもっと子どもの内面に迫ってみたい。そこで子どもの自己像を性格的な面と学力的な面に分け、成績が及ばず影響を探っていきたい。

#### ●性格的な面の自己像をめぐって)))

図9では性格的な面での自己像の項目15項目を設定し、子どもたちに自分自身はどんな子かをたずねたものである。子どもたちは「友だちが多い子」で、「おもしろいことを言って笑わせる子」であり、「運動が得意な子」「家の手伝いをよくする子」「忘れ物をしない子」「係の仕事をきちんとやる子」であ

るが、「クラスのリーダーをよくしている子」「先生にほめられることがよくある子」「学校行事やクラスの司会をするのがうまい子」ではないと思っているようである。

図10は性別を示した。「運動が得意な子」で「とても・わりとそう」と答えた男子は50.0%、女子31.3%とかなり顕著な差がみられる。

図9 自己像

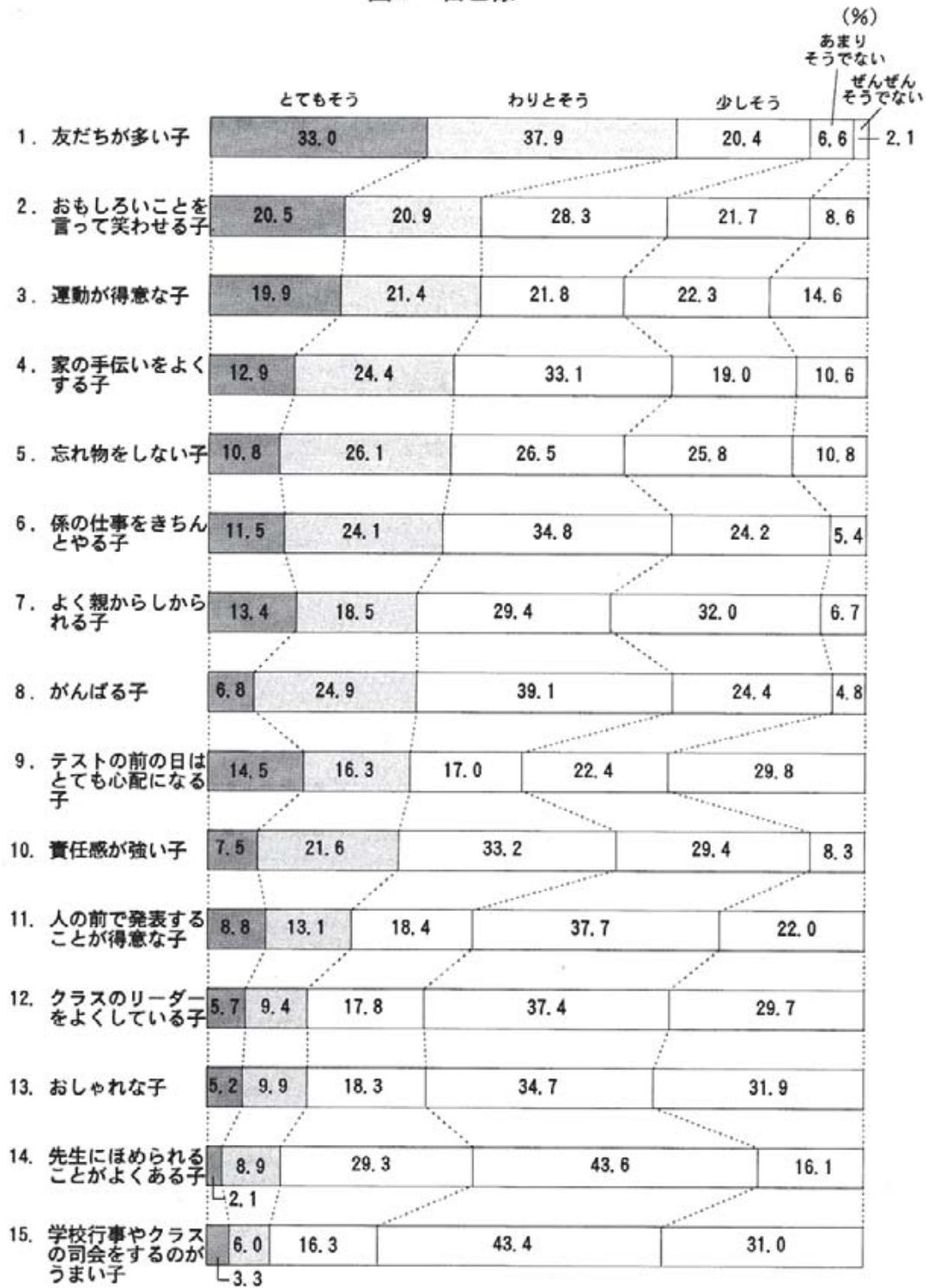
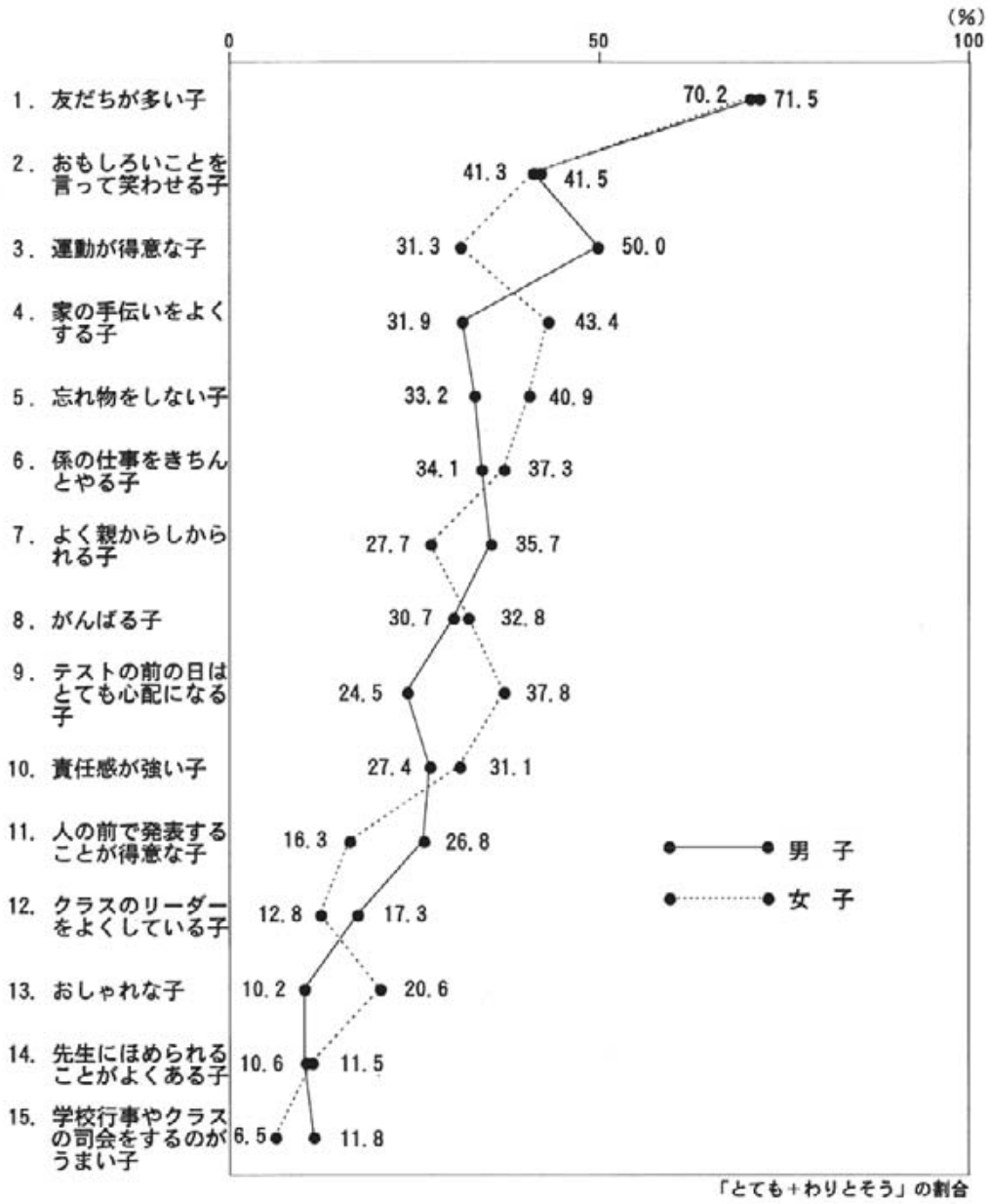


図10 自己像 × 性別





## (1) 成績のよい子の自己像は

表12、図11は自己像と成績との関係を示している。成績の上位の子は「友だちが多い子」「がんばる子」「人の前で発表が得意な子」「おもしろいことを言って笑わせる子」

「運動が得意な子」「忘れ物をしない子」「クラスのリーダーをよくしている子」などの項目で、著しく明るく自信に満ちた自己像を抱いている。成績の下位の子はよく親からしかられ、テストの前日はとても心配になり、友だちが少なく、責任感が乏しい。クラ

表12 自己像 × 成績

(%)

	全 体	上のほう	まん中 くらい	下のほう
1. 友だちが多い子	70.9	83.4	72.3	50.7
2. おもしろいことを言って 笑わせる子	41.4	57.8	36.1	25.0
3. 運動が得意な子	41.3	52.8	39.7	29.7
4. 家の手伝いをよくする子	37.3	41.1	36.7	37.8
5. 忘れ物をしない子	36.9	47.2	37.4	15.0
6. 係の仕事をきちんとやる 子	35.6	38.6	33.3	24.4
7. よく親からしかられる子	31.9	32.1	29.6	45.9
8. がんばる子	31.7	60.5	46.5	12.2
9. テストの前日はとても 心配になる子	30.8	25.0	31.9	27.1
10. 責任感が強い子	29.1	48.6	24.7	12.3
11. 人の前で発表することが 得意な子	21.9	59.7	15.7	12.2
12. クラスのリーダーをよく している子	15.1	44.4	9.9	9.5
13. おしゃれな子	15.1	17.6	14.4	6.8
14. 先生にほめられることが よくある子	11.0	29.3	7.7	5.5
15. 学校行事やクラスの司会 をするのがうまい子	9.3	34.7	6.7	2.8

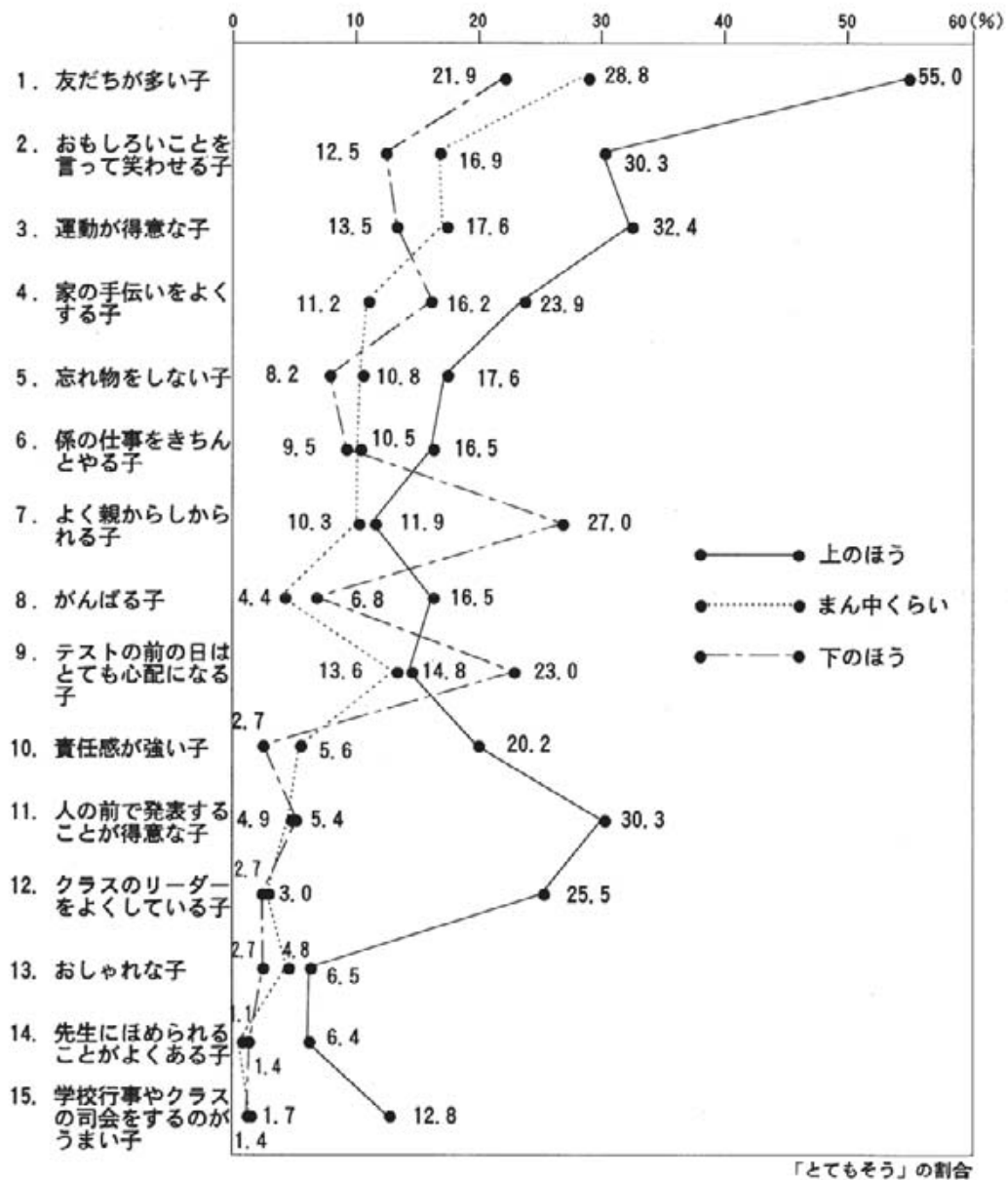
「とても+わりとそう」の割合

スのリーダーもしないし、学校行事やクラスの司会をするのも上手でないなど、とても暗く自信のない自己像を抱いている。この傾向は成績が下位になるにつれて一層強まっている。

## (2) 教科の得意・苦手と自己像

さらに数値を追ってみたい。表13では教科イメージとの関係を示した。得意な教科別に自己像の特徴をまとめると、

図11 自己像 × 成績



国語が得意な子の自己像

- ・友だちが多い子
- ・おもしろいことを言って笑わせる子
- ・テストの前日はとても心配になる子

算数が得意な子の自己像

- ・運動が得意な子
- ・忘れ物をしない子
- ・がんばる子

社会が得意な子の自己像

- ・家の手伝いをよくする子

表13 自己像 × 得意な教科

(%)

	国語	社会	算数	理科
1. 友だちが多い子	76.7	69.6	73.6	62.7
2. おもしろいことを言って笑わせる子	46.4	42.6	39.6	36.7
3. 運動が得意な子	38.9	39.4	44.4	39.3
4. 家の手伝いをよくする子	39.5	41.1	35.3	35.6
5. 忘れ物をしない子	39.9	35.4	42.7	28.9
6. 係の仕事をきちんとやる子	36.1	36.1	37.4	33.8
7. よく親からしかられる子	30.5	36.6	32.5	28.5
8. がんばる子	33.4	27.0	38.2	26.8
9. テストの前日はとても心配になる子	35.1	29.4	30.8	27.3
10. 責任感が強い子	30.6	25.4	30.2	25.9
11. 人の前で発表することが得意な子	24.6	27.3	22.3	14.9
12. クラスのリーダーをよくしている子	15.5	17.5	18.3	8.5
13. おしゃれな子	22.3	13.6	13.3	10.9
14. 先生にほめられることがよくある子	12.6	9.5	13.3	8.0
15. 学校行事やクラスの司会をするのがうまい子	11.0	12.7	8.6	5.5

「とても+わりとそう」の割合

・よく親からしかられる子  
である。

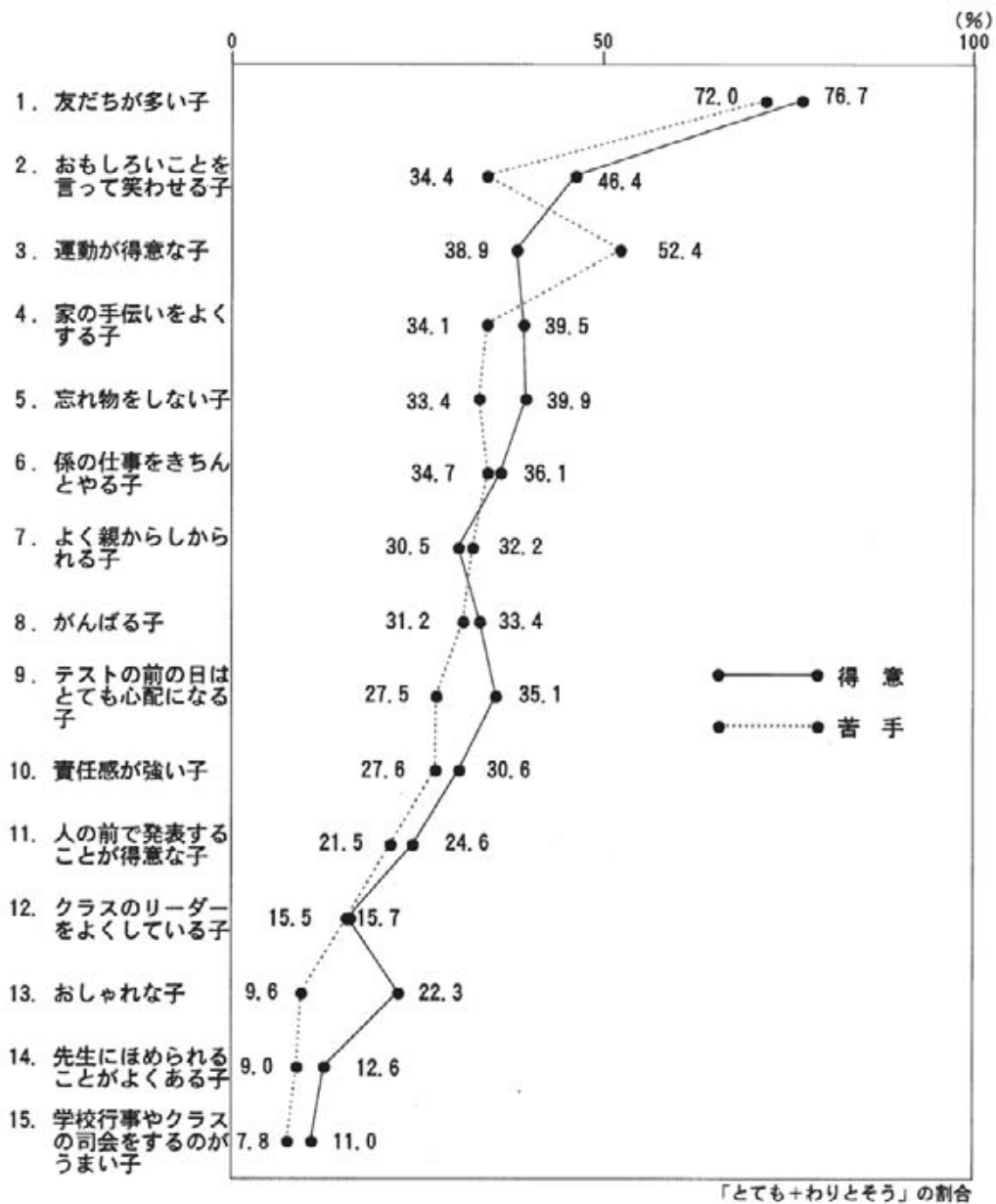
さらに図12、図13は、学習の中心を占めていると考えられる国語と算数の得意・苦手な子どもたちの自己像との関わりをみたもので

ある。両教科とも得意群のほうがわずかながら肯定的な自信のある自己像がみられる。

### (3) 中学受験と自己像

中学受験の有無ではどのような関係がある

図12 自己像 × 国語の得意・苦手



のだろうか。やはりここでも受験する子どもたちが明るく自信のある自己像を抱いている(図14)。

考えてみれば、教科の得意な子も中学受験をする子も成績の良し悪しと関連が深いので、

こうした自己像の傾向がほぼ一致することは当然なのかもしれない。

図13 自己像 × 算数の得意・苦手

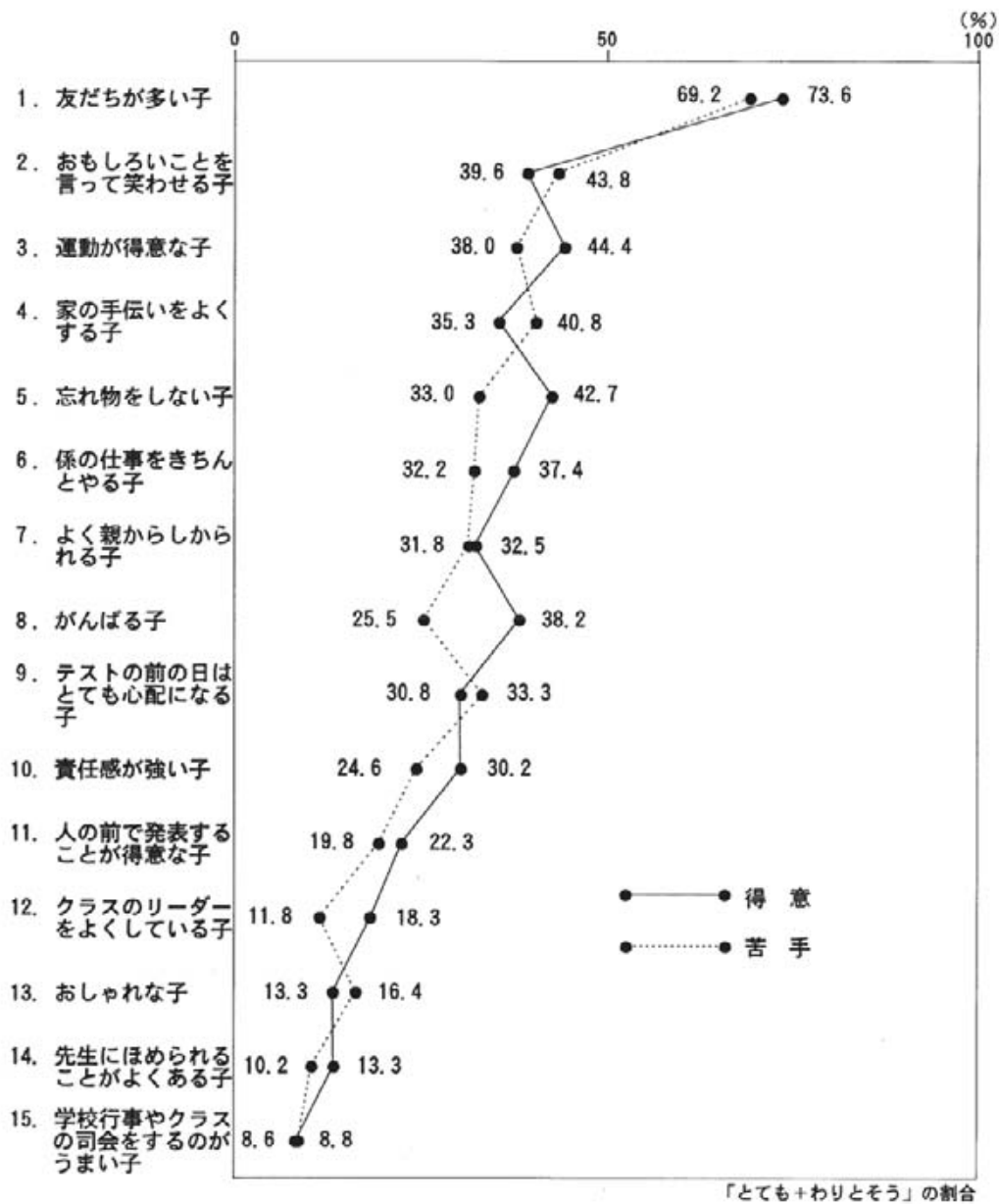
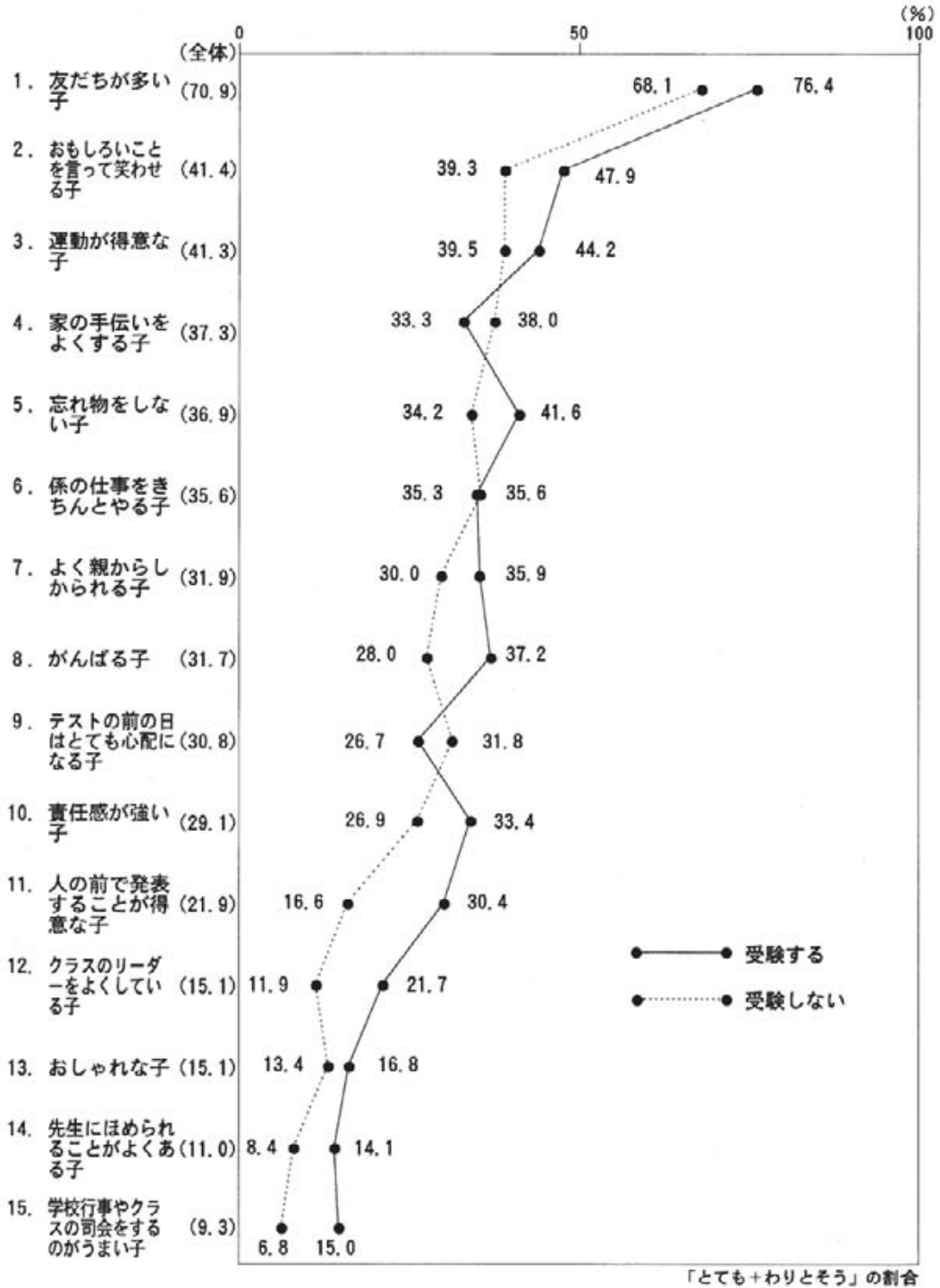


図14 自己像 × 中学受験



## ●学力面での自己像をめぐって)))

次に学習に関係すると考えられる16項目を設定し、学力の面で自分自身をどうとらえているかみていきたい。

図15は、「勉強についてどんな子か」をたずねたものである。そして、図16は性別を示した。男子では「ドッジボールなどのスポーツが好きな子」(71.7%)、「理科の実験の好きな子」(62.6%)、「走ったり、鉄棒を使った運動が好きな子」(47.9%)、「算数の計算問題が得意な子」(44.2%)、「新聞やテレビのニュースに関心がある子」(32.2%)、「算数の文章問題が得意な子」(32.8%)、「県や県庁のある都市の名前を知っている子」(31.4%)と、体育系や理数系、社会科に関したことが得意な子が多い。一方、女子では「本を読むのが好きな子」(59.2%)、「ピアノや楽器の演奏が得意な子」(41.3%)、「詩や作文を書くのが好きな子」(34.8%)と、文科系や芸術面分野で得意な子が多い。小学校5～6年生で、いわゆる文系、理系のタイプに分かれてしまうのだろうか。

### (1) 成績のよい子と学力面での自己像

図17、表14によれば、成績の上位の子はすべての学力面で高い数値を示している。成績の下位の子になるほど、学力面でも自己を否定的にとらえている。特に成績の上位の子は数値が高い。

### (2) 得意教科と学力面での自己像

表15、図18、図19は、得意な教科と学力面での自己像の関係をみたものである。国語が得意な子は国語的要素の学力を、算数が得意な子、社会・理科が得意な子も同様の傾向を

示している。教科の好き嫌いは成績の良し悪しと密接な関係を持っていることを考えれば当然であろう。

### (3) 中学受験と学力面での自己像

図20は中学受験との関係をみたものである。受験をする子のほうが、学力に関する自己像に著しく肯定的な高い数値を示している。

成績の良し悪し、教科の得意・不得意、中学受験などは子どもの学力に関する自己像のみならず、学習や勉強とあまり関係ない性格的な自己像にも大きな影響を与えている。しかも、成績のよい子、得意な教科のある子、中学受験する子の自己像は明るく、日常生活にも積極的で、学力にも高い自信を持って学校生活を送っている。

図21は、子どもたちの希望する将来の進路である。高校卒業後就職か家の手伝いは12.0%、専門学校・短大は16.2%、やさしい大学は8.5%、むずかしい大学を希望する子は15.5%である。

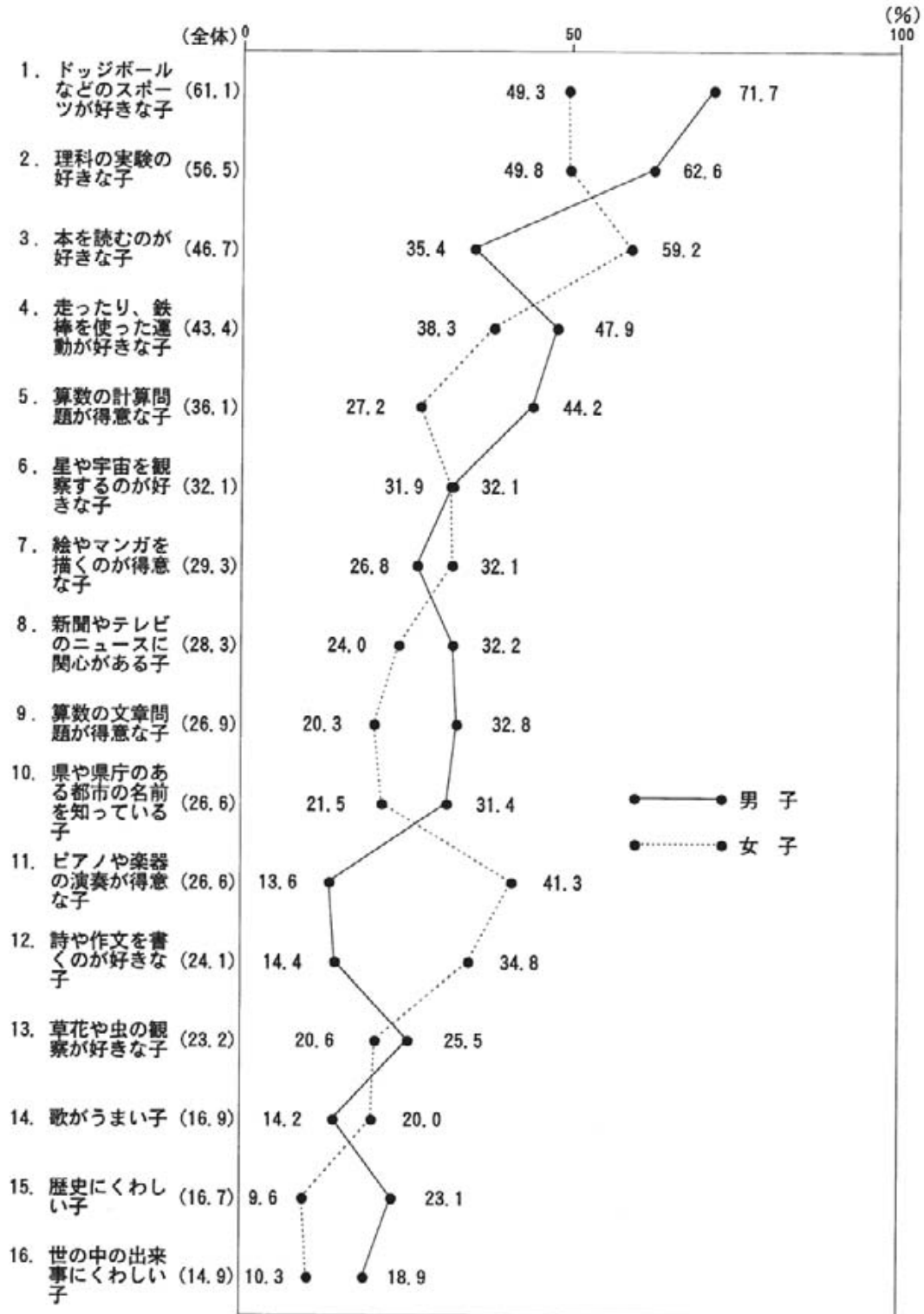
表16は成績と将来の進路の関係をみたものである。成績の上位の子はむずかしい大学を51.9%希望しているが、下位の子は高校卒業後就職かまだどうするか決められない。確かに小学生では将来の進路の実感がないのかもしれない。しかし、2章で示したように、下位の子にとっては、今後中学に行っても成績がよくなる見通しもあまり持たず、将来の仕事もなんとなく期待の薄いようなものなのであろう。その上、成績のよさは「まじめな努力の結果」と考える傾向の中で、暗い自己像と学力に自信の持たない子どもたちを学校生活のどこで支えてやれるのだろうか。

図15 勉強についてどんな子が

	(%)				
	とても そう	わりと そう	少し そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. ドッジボールなどのスポーツが好きな子	43.0	18.1	16.1	13.8	9.0
2. 理科の実験の好きな子	31.3	25.2	23.6	13.5	6.4
3. 本を読むのが好きな子	25.9	20.8	23.6	19.2	10.5
4. 走ったり、鉄棒を使った運動が好きな子	24.9	18.5	18.6	22.3	15.7
5. 算数の計算問題が得意な子	16.9	19.2	22.9	26.1	14.9
6. 星や宇宙を観察するのが好きな子	15.3	16.8	21.7	30.1	16.1
7. 絵やマンガを描くのが得意な子	14.4	14.9	21.3	31.0	18.4
8. 新聞やテレビのニュースに関心がある子	10.6	17.7	25.4	29.5	16.8
9. 算数の文章問題が得意な子	12.2	14.7	22.6	31.3	19.2
10. 県や県庁のある都市の名前を知っている子	14.2	12.4	20.7	32.6	20.1
11. ピアノや楽器の演奏が得意な子	12.4	14.2	18.8	27.0	27.6
12. 詩や作文を書くのが好きな子	10.2	13.9	19.7	31.1	25.1
13. 草花や虫の観察が好きな子	11.3	11.9	21.7	36.5	18.6
14. 歌がうまい子	7.1	9.8	20.2	34.3	28.6
15. 歴史に詳しい子	8.1	8.6	18.1	34.6	30.6
16. 世の中の出来事に詳しい子	5.8	9.1	22.0	38.2	24.9

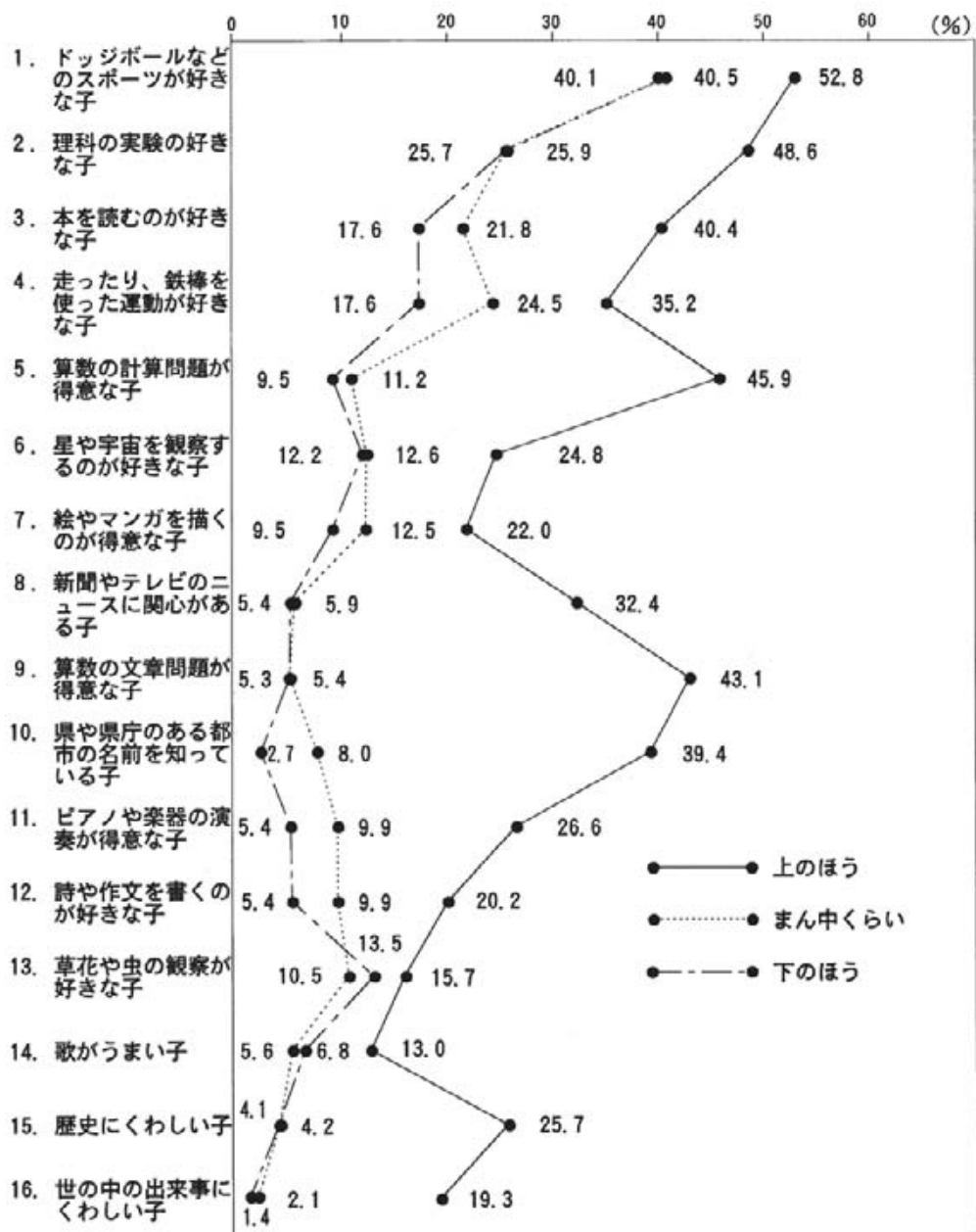


図16 勉強についてどんな子が × 性別



「とても+わりとそう」の割合

図17 勉強についてどんな子か × 成績



「とてもそう」の割合

表14 勉強についてどんな子が × 成績

(%)

	全 体	上のほう	まん中 くらい	下のほう
1. ドッジボールなどのスポーツが好きな子	61.1	70.4	60.8	51.3
2. 理科の実験の好きな子	56.5	74.3	53.4	47.3
3. 本を読むのが好きな子	46.7	58.7	43.6	27.1
4. 走ったり、鉄棒を使った運動が好きな子	43.4	56.5	43.1	36.5
5. 算数の計算問題が得意な子	36.1	70.7	29.6	16.3
6. 星や宇宙を観察するのが好きな子	32.1	45.9	29.2	25.7
7. 絵やマンガを描くのが得意な子	29.3	36.9	27.7	16.3
8. 新聞やテレビのニュースに関心がある子	28.3	62.0	21.1	17.6
9. 算数の文章問題が得意な子	26.9	72.5	17.2	12.2
10. 県や県庁のある都市の名前を知っている子	26.6	58.7	19.7	9.5
11. ピアノや楽器の演奏が得意な子	26.6	42.2	22.7	14.9
12. 詩や作文を書くのが好きな子	24.1	34.9	23.6	13.5
13. 草花や虫の観察が好きな子	23.2	34.2	22.8	18.9
14. 歌がうまい子	16.9	27.8	14.4	10.9
15. 歴史にくわしい子	16.7	45.0	9.9	9.5
16. 世の中の出来事にくわしい子	14.9	44.1	7.8	2.8

「とても+わりとそう」の割合

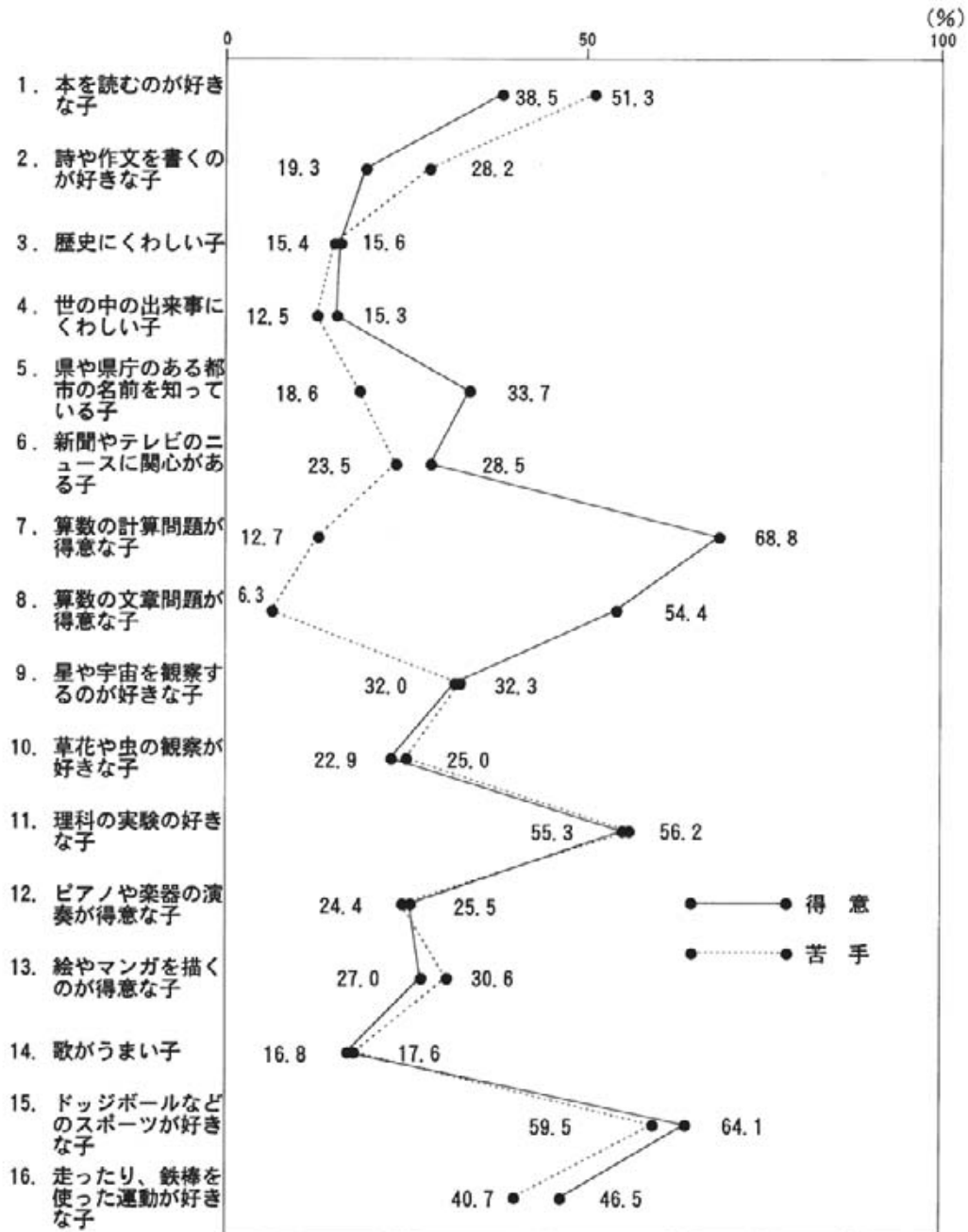
表15 勉強についてどんな子か × 得意な教科

(%)

		国語	社会	算数	理科
国 語	1. 本を読むのが好きな子	61.2	49.1	38.5	40.7
	2. 詩や作文を書くのが好きな子	39.6	20.7	19.3	19.1
社 会	3. 歴史にくわしい子	11.9	38.3	15.6	7.8
	4. 世の中の出来事にくわしい子	12.1	27.1	15.3	7.4
算 数	5. 県や県庁のある都市の名前を知っている子	22.5	39.0	33.7	13.3
	6. 新聞やテレビのニュースに関心がある子	28.4	39.3	28.5	20.1
理 科	7. 算数の計算問題が得意な子	24.5	25.4	68.8	18.1
	8. 算数の文章問題が得意な子	14.6	21.0	54.4	12.3
	9. 星や宇宙を観察するのが好きな子	34.4	28.1	32.0	36.0
芸 術	10. 草花や虫の観察が好きな子	20.5	17.9	22.9	32.9
	11. 理科の実験の好きな子	46.1	52.5	55.3	76.2
	12. ピアノや楽器の演奏が得意な子	35.5	23.6	25.5	21.7
体 育	13. 絵やマンガを描くのが得意な子	33.9	27.0	27.0	30.4
	14. 歌がうまい子	21.5	15.2	16.8	13.1
体 育	15. ドッジボールなどのスポーツが好きな子	58.7	59.8	64.1	62.2
	16. 走ったり、鉄棒を使った運動が好きな子	41.6	42.9	46.5	43.4

「とても+わりとそう」の割合

図18 勉強についてどんな子が × 算数の得意・苦手



「とても+わりとそう」の割合

図19 勉強についてどんな子が × 国語の得意・苦手

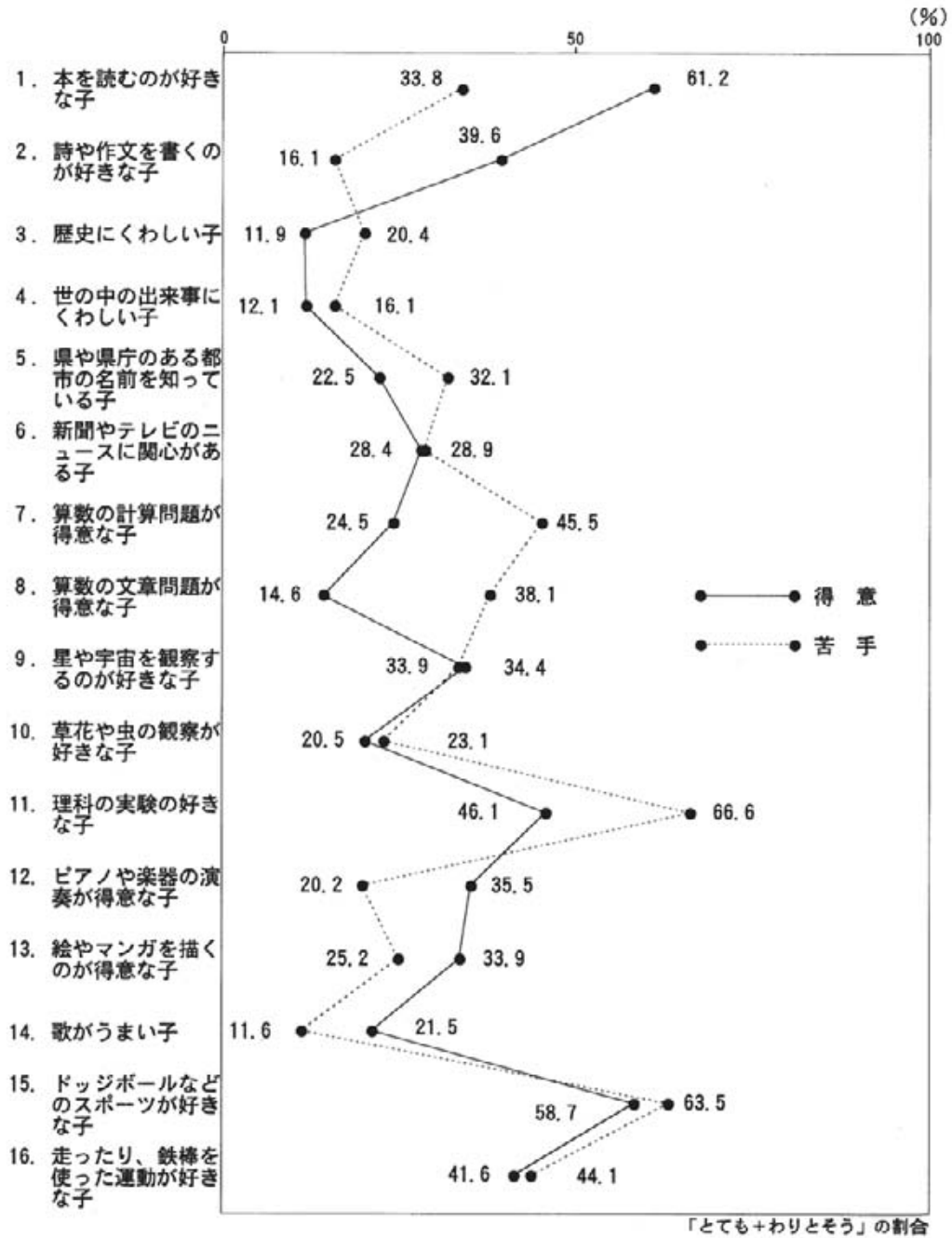


図20 勉強についてどんな子か × 私立中学受験

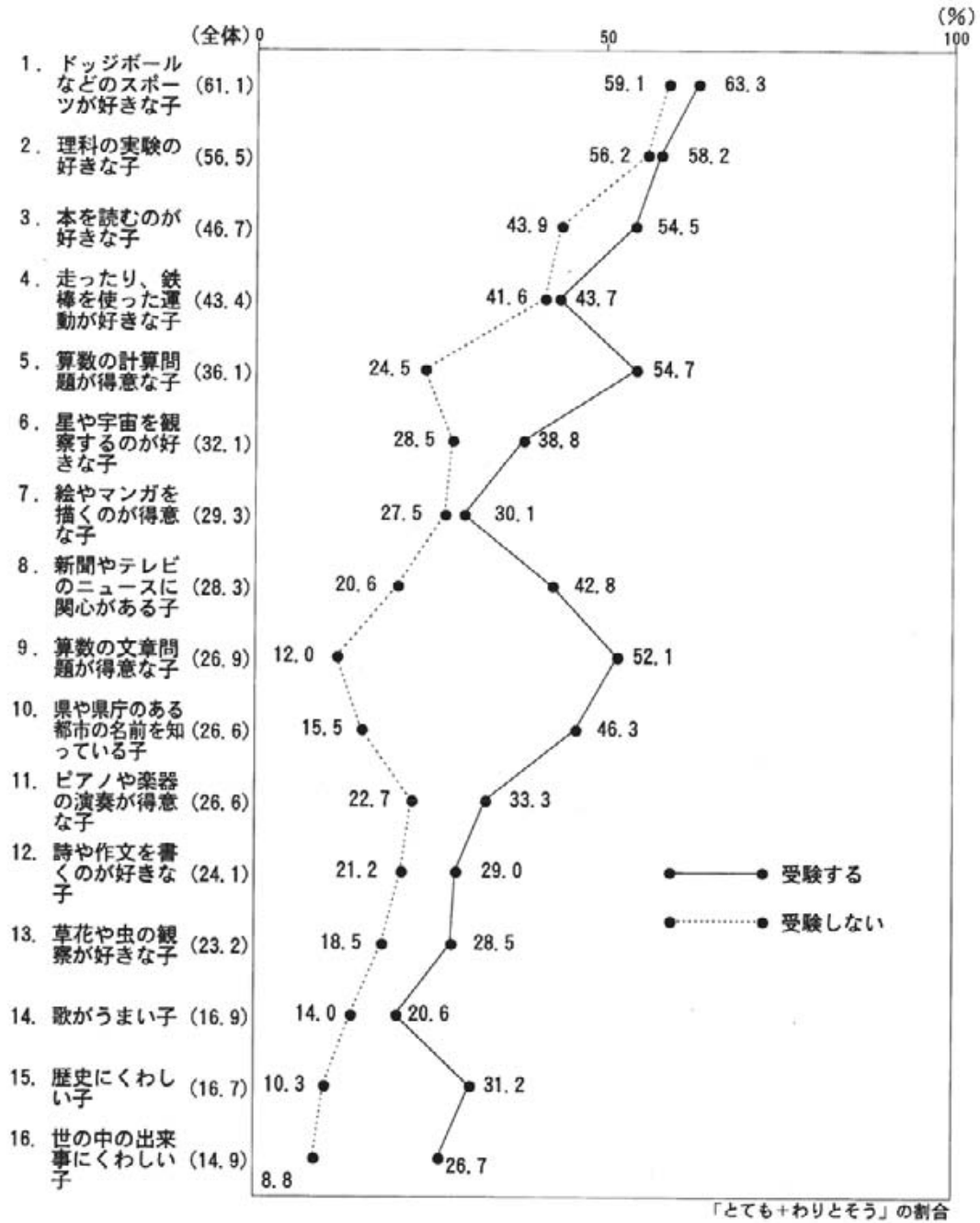


図21 将来の進路

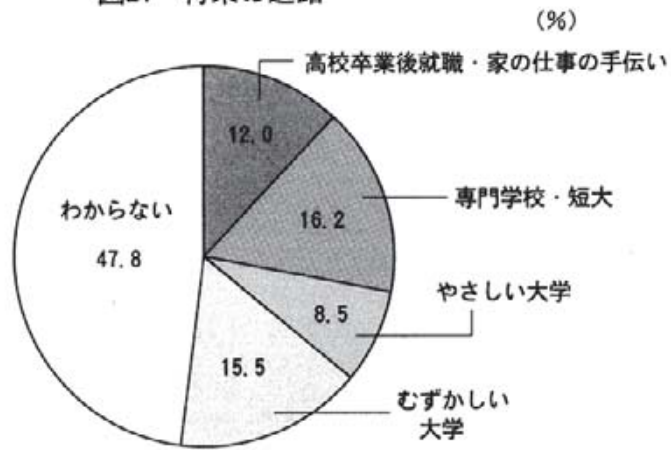


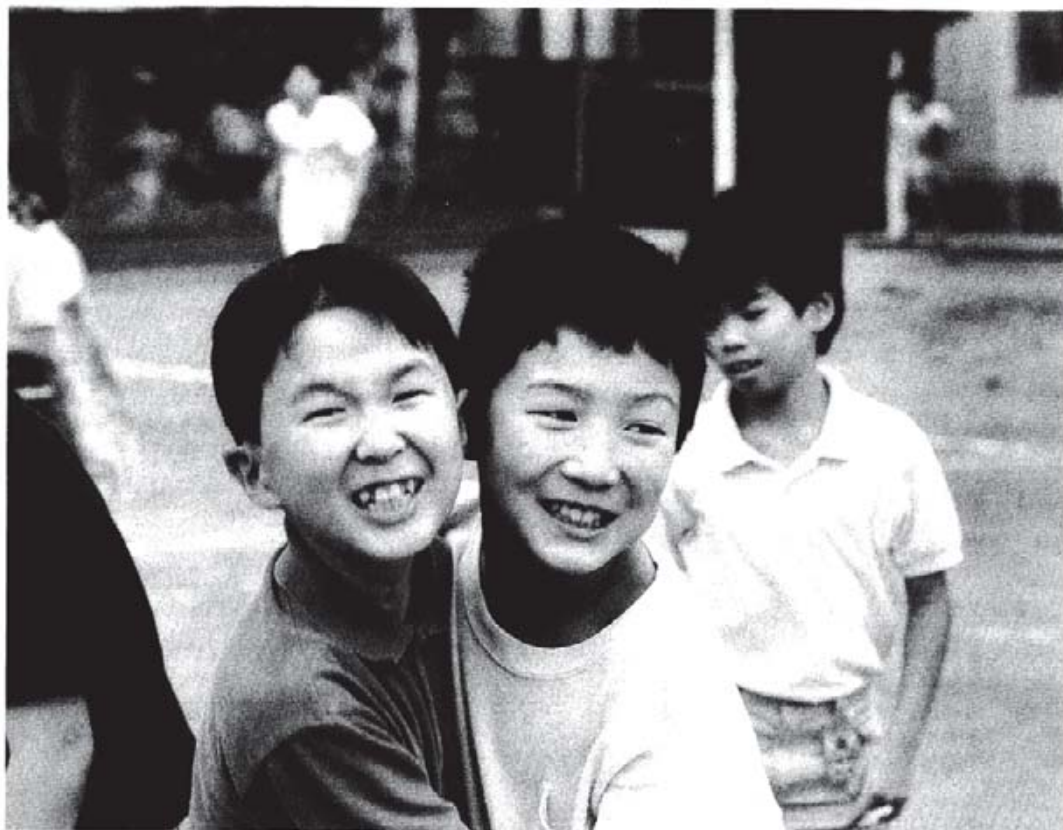
表16 将来の進路 × 成績

(%)

	高校卒業後就職・ 家の仕事の手伝い	専門学校・短大	やさしい大学	むずかしい大学	わからない
上のほう	1.9	14.2	2.8	51.9	29.2
まん中より上	7.6	17.1	8.9	26.6	39.8
まん中くらい	13.0	18.0	9.3	7.7	52.0
まん中より下	20.4	11.8	8.6	5.4	53.8
下のほう	18.9	9.5	8.1	1.4	62.1



## 4. 学習を支える環境



日々、子どもたちと一緒に生活していると、学級の中には成績が悪くとも、学校で生き生き生活している子どもたちはたくさんいる。

最後に学習を支える環境として、学校の楽しさ、友だち、先生、両親についてみていきたい。

### ●学校は楽しいか)))

表17は「学校が楽しいか」をたずねたものである。「とても楽しい」34.2%、「かなり楽しい」25.3%、「少し楽しい」まで含めると、約85%の子どもたちは学校の楽しさを感じている。

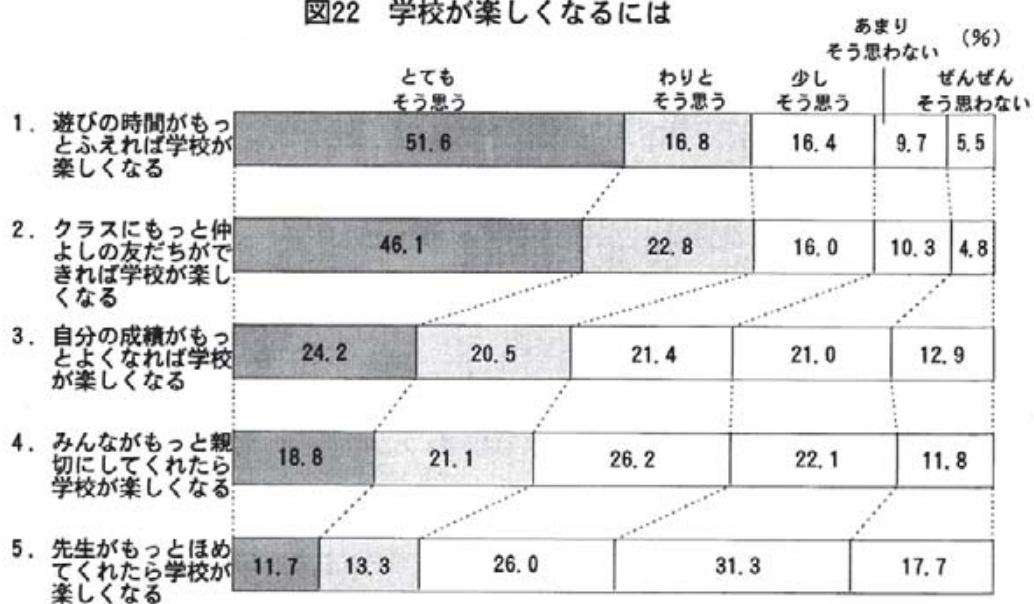
図22は「学校が楽しくなるにはどうすればよいか」をたずねたものである。「遊びの時

間がもっとふえれば」と答えた子の「とても・わりとそう思う」割合は68.4%、「クラスにもっと仲よしの友だちができれば」では68.9%、「自分の成績がもっとよくなれば」では44.7%、「みんながもっと親切ならば」39.9%である。学校生活に期待している重要なものは、遊びと友だちとの人間関係であるようだ。

表17 学校は楽しいか

(%)					
とても 楽しい	かなり 楽しい	少し 楽しい	あまり 楽しくない	かなり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない
34.2	25.3	26.2	7.6	2.4	4.3

図22 学校が楽しくなるには



## ●友だち関係は)))

では、子どもたちは、どんな友だちを何人ぐらい持っているのだろうか。図23によれば、学校で一緒に遊ぶ友だちは少なくとも1人はいる子が約98%、6人以上持っている子も約60%いる。しかし、テストの点数を競争したり、家で一緒に勉強する友だちとなるとずっと少なくなる。

表18は友だちの多さと成績との関係である。ここでも成績の上位の子は「学校で一緒に遊ぶ友だち」「家に帰ってから遊ぶ友だち」

「スポーツやタレントのことを話す友だち」「勉強のことを話す友だち」と、たくさんの友だちを持っている。一方、成績の下位の子は、全体に友だちの人数が少ない。特に「学校で一緒に遊ぶ友だち」が「1人もいない子」が5.5%もいる。高校生でさえも学校で一緒にいる友だちが1人もいなくなってしまうと、学校に対して意欲を失ってしまうことを考えれば、かなり深刻な問題として考えていかなければならないだろう。

図23 友だちの多さ

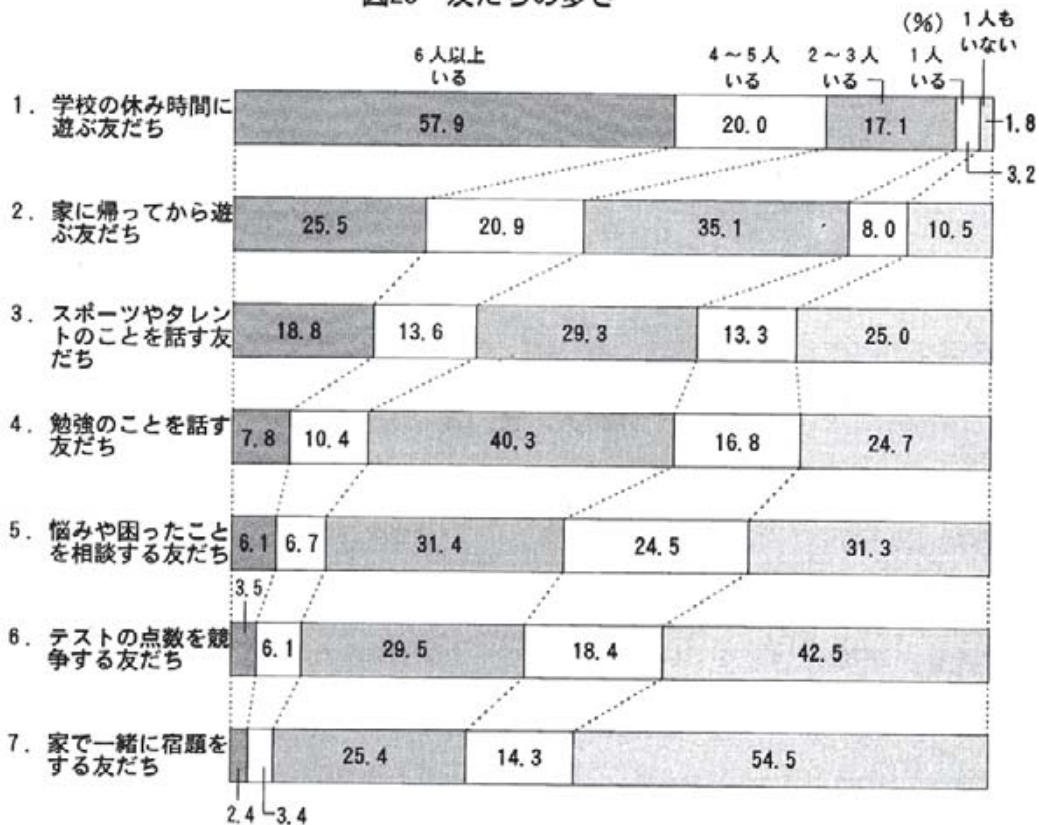


表18 友だちの多さ × 成績

	(%)		
	上	中	下
1. 学校の休み時間に遊ぶ友だち	85.6 (1.9)	78.2 1.2	60.6 5.5)
2. 家に帰ってから遊ぶ友だち	50.0 (17.0)	44.7 7.5	36.6 15.5)
3. スポーツやタレントのことを話す友だち	43.4 (18.9)	32.5 23.4	15.1 39.7)
4. 勉強のことを話す友だち	29.9 (13.1)	16.2 24.7	15.0 43.8)
5. 悩みや困ったことを相談する友だち	20.8 (22.6)	12.0 30.4	12.5 43.1)
6. テストの点数を競争する友だち	18.6 (25.2)	8.3 44.9	4.1 61.6)
7. 家で一緒に宿題をする友だち	5.8 (66.7)	7.4 49.6)	6.8 63.0)

「4人以上いる」割合  
( ) 内は「1人もいない」割合

## ●先生は)))

では、先生は子どもたちにどんな接し方をしているのだろうか。表19は先生が日ごろ子どもたちに「してくれること」をたずねたものである。「宿題を出す」を「しょっちゅうしている」割合は45.9%、「ノートに赤ペンを入れてくれる」のは27.2%、それ以外の項目ではあまりしてもらっていると感じていないようである。

さらに、子どもたちに「先生から言われて一番いやな言葉は」と自由記述によりたずねたところ、

・バカ、バカもの

- ・反省文10枚ね
- ・ひっぱたくよ
- ・ふざけるな
- ・静かにしろ
- ・早くしろ
- ・まったく男は最低だから
- ・すぐ後ろで立ってなさい
- ・程度が低い
- ・塾に行ったりして、どうかしてるんじゃない
- ・そんなことじゃ、中学受からないわよ
- ・受験生ということを自覚しなさい
- ・受験勉強なんかしたりして、どうなるんだ

表19 先生がしてくれること

	(%)				
	しょっちゅう ある	わりと ある	たまに ある	あまり ない	ほとんど ない
1. 宿題を出す	45.9	19.7	18.2	9.5	6.7
2. ノートなどに赤ペンを入れてくれる	27.2	19.6	21.4	15.6	16.2
3. 先生の子どものころの話をしてくれる	18.9	17.0	24.1	16.3	23.7
4. 家で自主的に勉強をしたところを見てくれる	14.6	13.1	14.7	21.0	36.6
5. 困ったときの相談にのってくれる	11.9	17.8	24.1	19.9	26.3
6. よくしかられる	8.7	14.6	35.7	28.8	12.2
7. よく手伝いをたのまれる	7.8	18.1	38.3	24.0	11.8
8. 家での勉強のしかたを教えてくれる	6.7	15.8	24.5	25.7	27.3
9. よくほめられる	2.9	7.4	35.6	35.3	18.8
10. 休み時間に先生と一緒に遊んでくれる	2.9	4.7	11.6	20.0	60.8

- ・漢字を書きなさい
- ・宿題しろ
- ・もうちょっと算数と理科がんばれ
- ・字がきたない
- ・もっと勉強しなさい、いい成績になりませんよ
- ・おまえら、それでも5年生か
- ・中学生になったら、もっとむずかしいのよ
- ・成績下げますよ

- ・今日、残りなさい
  - ・あまっている時間を有効に使いなさい
- (1,433人中348人回答)

以上のような言葉が代表してあげられた。

これらの言葉は子どもたちが書いたものをそのまま載せたものである。もちろん、言われる側の子どもたちの感情が多分に混じったものであろう。

## ●お母さん・お父さんは)))

子どもたちの学習を支える環境の最後として、表20で両親の勉強への関心の割合を見てみたい。母親が子どもに「勉強しなさい」と「しょっちゅう言う」割合は30.4%、「わりと

言う」を合わせると約5割、「宿題は終わったの」では「しょっちゅう言う」が25.6%、「わりと言う」を含めて約4割である。父親はすべての項目で、「ほとんどない」が最も

表20 両親の子どもの勉強への関心度

(%)

	お母さん					お父さん				
	しょっちゅう ある	わりと ある	たまに ある	あまり ない	ほとんど ない	しょっちゅう ある	わりと ある	たまに ある	あまり ない	ほとんど ない
1. 「勉強しなさい」と言われる	(30.4)	21.9	22.6	12.5	12.6	12.3	11.9	18.5	17.0	(40.3)
2. 「宿題は終わったの」と言われる	(25.6)	16.9	18.7	15.1	23.7	8.3	7.2	11.9	18.4	(54.2)
3. テストの平均点を聞かれる	6.8	5.7	11.2	20.5	(55.8)	3.6	2.1	6.0	15.9	(72.4)
4. 「テレビばかり見て」としかられる	14.9	15.0	18.8	21.1	(30.2)	6.7	7.0	14.2	19.2	(52.9)
5. 「授業中しっかり先生の話を聞きなさい」と言われる	16.2	12.9	19.4	22.4	(29.1)	7.4	6.7	14.5	19.6	(51.8)
6. 「テストのとき、答えを見なおしなさい」と言われる	20.2	14.3	16.6	19.2	(29.7)	8.7	7.9	11.6	18.4	(53.4)
7. 「中学はよい学校に入らなければだめ」と言われる	9.0	5.1	8.8	18.6	(58.5)	6.5	4.6	8.6	17.8	(62.5)
8. ドリルや参考書などを買ってくれる	15.9	16.2	22.5	15.6	(29.8)	7.5	7.1	13.1	15.3	(57.0)
9. 宿題などを教えてくれる	11.0	15.5	23.5	17.2	(32.8)	11.6	15.6	21.9	15.2	(35.7)

高い数値を示している。

表21は、「まとめのテストでとったらしかられる点数」を示した。父親、母親から「100点でなければしかられる」という子は約3%、「90点以下のときしかられる」割合を含めると約1割の子どもがしかられていることになる。この数値が親たちの教育過熱状況の表れなのか意見の分かれるところであろうが、少なくとも「100点でなければ」とい

うのは子どもを精神的に追いつめているように思うのは筆者だけだろうか。

表22は「お父さんやお母さんが子どものころ、あなたより勉強が好きだったか」をたずねたものである。両親とも「あなたよりずっと勉強が好きだった」と思われている割合は約2割、「少し好きだった」を含めると約5割に達する。


表21 テストの点で、お父さん・お母さんがしかると思う点数は  
(まとめのテスト)

	100点 でなければ しかる	90点 以下のとき しかる	80点 以下のとき しかる	70点 以下のとき しかる	60点 以下のとき しかる	50点 以下のとき しかる	何点でも しからない
お母さん	3.2	6.0	14.5	19.8	16.5	15.8	24.2
お父さん	2.6	5.2	10.6	16.0	12.2	15.4	38.0

表22 お父さんやお母さんが子どものとき、あなたより勉強が好きだったか

	あなたより ずっと勉強が 好きだった	あなたより 少し 好きだった	同じ くらい	あまり 好きで なかった	嫌い だった
お父さん	21.3	24.3	28.0	15.7	10.7
お母さん	20.0	29.1	32.1	11.6	7.2

---



## まとめに代えて

子どもたちを見ていると、歌が上手に歌える子もいれば、苦手な子もいる。算数や国語は苦手でも、暑い太陽のもと汗を流して部活動に励んでいる子もたくさんいる。国語は苦手だが歴史にはとてもくわしい子どももいる。そうした子どもたちが、やがて社会に出たとき、やさしさや誠実さや粘り強さ、本当の友だちなど人間として大切なものが、そうした活動の中から育っていると願いたい。そして、彼らが自信を持って自分の将来に夢を持って生きていくことを願いたい。

しかし、今まで見てきた調査の中からは、算数や国語の成績のよい子の自己像は明るく、友だちも多く、学習への積極さと自信が見られる。しかし、算数や国語の成績の悪い子どもたちは友だちも少なく、先生との関わりもあまりなく、学力面での自己像は言うに及ばず、勉強とはあまり関係ないような性格的な面でも自信を失っているようである。

そうした成績の不振な子のよりどころを学校のなかでつくりだし、充実した学校生活を体験できるよう環境を整えていく必要があることを強く感じた調査であった。